家庭雜誌

第參拾貳號

◎國民新聞の本領『不羈獨立』

不羈獨立の氣魄を以て、隱然一敵國たるものあらば、國民新聞は、確かに其一に居らむ。

藩閥割據に對する國民的精神。有司專制に對する責任內閣。自主的外交に對する自主的外交是れ國民新聞が百危千難を抵當として、熱心主張する所なり。若しそれ社會の公德を扶植し、善風美俗を長養し。國民の精神を陶冶し。國家の元氣を積蓄し。以て立憲國たるの百年の大計を定めんとするが如きは、是れ國民新聞の宿志也。

◎國民新聞の眞價（新聞中の新聞）

國民新聞の眞價は新聞中の新聞たるにあり。其着眼、恒に他の新聞に一歩を先んせり。總て新奇なる問題は、國民新聞の爲めに看取せられ、論破せられ、說明せられ、而して漸々世間の注意を博するに到るなり。約言すれば國民新聞は新聞中の急先鋒なり。

◎國民新聞の本色『多角的』

多角的を以て新聞の本色とせば、國民新聞確かに其の一に居らむ。國民新聞は、政治問題に就て、特別の手眼を有するに係らず、淸新健全なる文學。世態人情に關する同情多くして、深切なる社會的觀察。社會の血管を縱橫する思想の潮流。殖產興業。通商貿易、その他一切經濟の大勢及び社會人事の森羅萬象。悉く擧げて漏らす所なし。

◎國民新聞の紙面（利益と快樂と併せ兼ぬ）

重大なる問題に際しては。滔々汨々數千言の大論文を掌す。日々の問題に關しては、三四乃至五六の小品論評あり。政治上の主流、大勢を揣摩するには精嚴奇警なる雜報あり。海外時事。文學時事。社會問題。演說筆記。行樂案內。演劇批評。新刊書批評。時事短評。流行案內。經濟事情。その他通信は朝鮮琉球より內地の各所に及び。之に加ふるに雄奇精妙なる挿畫あり。日曜附錄更に社員諸氏獨方結撰の文學的、社會的文學を揭載す、一たび之を手にすれば再た措く能はざらしむ。變化あり波瀾あり、人をして快樂と利益を併せ兼ねしむ

定價

	定價	地方郵稅
一枚	一錢五厘	五厘
一ケ月	三十五錢	十三錢
三ケ月	壹圓	三十九錢
六ケ月	壹圓九十五錢	七十八錢
一ケ年	三圓九十錢	一圓五十六錢

廣告料

一行の代價は左の如し
但五號活字二十二字詰

一回	十三錢
二回以上	十二錢
五回以上	十錢

發行所 東京市京橋區日吉町 國民新聞社

德富猪一郎著

國民叢書 第六冊

天然と人

定價拾五錢 郵税四錢

近刊

本書題して「天然と人」と云ふ、是れ民友子が總ての人事と天然とに關する雜記隨筆類を輯錄したるものにして、旅行記あり（譬へば阿蘇の烟、京海道中記の如き）、通信文あり（譬へば熱海だより、逗子だよりの如き）、書簡文あり（譬へば總撰擧夢の跡の如き）將又た傍聽傍觀記（帝國議會の）あり、其他あり。而して是皆な不用意の文字に從ひ、而かも亦赤心の觀察に出で、同情の眞念に發したるものなれば、其天眞流露して、恰も空山に水流れ花開くるが如く、神味の悠然たるものあると同時に其觀察精到深至、能く事物の眞を穿ち人情の根底に達し、人をして肉飛び眉躍るの感あらしむ。故に風景を寫しては、乍ち几邊に山聳へ川流れ、風土を叙しては、眼前宛として乍ち農家、漁村、野翁、村嫗、桑麻、稲田、春祝、秋祭の狀を見、人情、風俗、生活、其現在、其未來、其過去、或は有形、或は無形、物として具らざるはなく、事として悉さゞるは無きを見る、其他古跡を尋ねては、則ち歷史の因緣に遡り、校舍を音づれては、則ち兒童の性情を稽へ、或は人物論となり、或は名地贊となり、詩歌となり、逸事となり、朋友となり、故鄕となり、變化百端、趣味滿溢、一々指陳すべからず。若夫れ一大活劇たる帝國議會の光景（特別なる）を描すの手腕に至ては、吾人の呶々を要せず、思軒居士の言之を證して餘あり曰く、「見て國民の解散の光景に至て覺へず目燗肉動くユーゴー隨見錄の議會の事を記するも亦た之より加ふる能はず云々」然らば知るべきのみ、此書を讀むは、それ猶ほ江山清風の邊に臥しながら、耳に社會の逸聞を聽き、目に天下の活劇を見るが如くならんのみ、世豈に斯の如き快事あらんや、世豈に斯の如き消夏法あらんや、若し之を得んと欲する人は只此書を讀んで得よ、只此書を讀むで得よ。

八版 國民叢書 **靜思餘錄** 定價拾五錢 郵税四錢

四版 國民叢書 **人物管見** 定價拾五錢 郵税二錢

五版 國民叢書 **青年と教育** 定價拾五錢 郵税四錢

三版 國民叢書 **文學斷片** 定價拾五錢 郵税四錢

發兌元

東京々橋區日吉町 民友社

十冊完成 一冊讀切

家庭叢書

定價一冊拾錢郵稅全二錢

新日本國民の地盤たる可き新家庭の建設、今日より急なるはなく、新家庭の模範及嚮導の欠亡、今日より著しきはなし。是を以て新家庭建設の必要を感じ、家庭改革に心ある者も、茫として從ふ所を知らざるの看あるは、固に遺憾と云ふ可し。

我社此に見るあり、聊か世の急需に充てむが爲、此たび新に「家庭叢書」を發行し、以て新家庭建設に於ける一の燈明たらんことを期す。

「家庭叢書」は婦人小兒も容易に解し得可き平易親切の文字を以て、何人も心得となる可き家庭問題を說き明し、家庭の組織、家庭の改革、家庭の教育、家庭の經濟と生活、家庭の衛生、家庭の娛樂、國に對し人に對する家庭の關係、家庭の弊害及矯正、家庭の實用學問、渾て家庭に關してあらゆる心得となり實地の訓戒となり嚮導となる可く件々を明白親切に說明し、以て世の家庭を司どり若くは司どらんとする諸君が模範的新家庭を築き家庭の改革をせらるゝにつきて、親切なる相談相手となり、嚮導となり、顧問役となり、助言者となるは、「家庭叢書」の期する所也。

「家庭叢書」は實地の適用を旨とするが故に、文章は明白平易、色々の議論、種々の學問、色々の事實、すべて讀むで知り知つて行ひ得可く適切着實ならんことを期す。

既刊

家庭叢書第一卷 家庭の和樂

定價拾錢郵稅二錢

愈々家庭叢書第一卷『家庭の和樂』出でたり、何の爲めに出でたる耶、其題號の示せる如く、編者今日我國家庭の實情を患ひ、別に家庭の別天地を開き、新しき家庭の和樂を作さんとするにあり、家庭和樂を如何にして得べきや、先づ家庭の憲法は一家生命なるを說き、一面には權現樣以來の家風を排し、一面には又世に經驗乏しき學校出身の妻君を非難し、然らば如何にして家風を興すべきやとて、細に其方針を指し、武士は喰はねど高楊枝して乞兒になると、妻君が働きて錢を貯ふると、借金の爲に首の廻らぬと、味噌漉を抱えて豆腐を買ふと其孰れが是なるか非なるかを論じ借金をせぬ工面は如何、貯金をする簡易の方法は如何と敎へ家庭の治安を謀るには舅や姑や小姑やを如何にすべきや、下女と結髮女と隣人は家庭の和樂に如何なる影響を及ぼすか、家庭遊樂の撰擇の如何は、收て皆此一小冊子の中にあり、文章通俗にして多くの學說を引用せざれど、要は唯だ實例を舉て爲し得らるべき家庭の和樂を計るにあり、

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

廣告

- 吉田松陰　定價五拾錢　郵稅八錢
- グラッドストン　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 武雷土　定價拾五錢　郵稅四錢
- 格武電　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 格朗穵　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 伊太利建國三傑　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 幕府衰亡論　定價卅五錢　郵稅六錢
- 懷往事談付新聞紙實歷　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 新日本史上　定價四拾錢　郵稅六錢
- 新日本史中　定價三拾錢　郵稅六錢
- 近世欧米歷史之片影　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 第二之維新　定價拾錢　郵稅貳錢

- 國民的大問題　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 政黨論　定價廿五錢　郵稅四錢
- 英米佛比較憲法論　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 排僞哲學論　定價拾貳錢　郵稅貳錢
- 第一國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢
- 第二國民小說　定價拾五錢　郵稅六錢
- 第三國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢
- 第四國民小說　定價拾五錢　郵稅四錢
- 歸省　定價拾五錢　郵稅四錢
- 懷舊　定價貳拾錢　郵稅四錢
- 最暗黑之東京　定價拾參錢　郵稅二錢

發兌元　民友社

東京市京橋區日吉町四番地

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價

一冊 金五錢 郵稅 金五厘

半年（十二冊）前金五十錢 地方共郵稅 金五十六錢

一年（廿四冊）同 金一圓 方共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純朗

編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年六月二十五日發行
家庭雜誌第參拾貳號

目錄



家庭雜誌第參拾貳號

（明治二十七年六月二十五日發兌）

社說

孝養

孝は百行の本なりとは、洵に道理ある言葉にして、苟もその父母に孝なるものにして、其の身を持ち崩すものはなし。

人情の最も手近く彰はるゝは、その父母に對する仕打にあり、その父母に對する心掛けにあり。父母に對して眞實に、親愛に、甲斐〴〵しきものは、其の兄弟に對しても、朋友に對しても、世間に對しても、必らず不都合なる行ある可らず、孝は百行の本なりとは、此邊の意味合ひなり。

『親を思ふ心にまさる親心、今日の音づれ何と聞らむ』とは、是れ吉田松陰が、殉難の血を濺ぐの時に口占したる辭世なり。斯る義人の忠肝義膽も、詮じ來たれば、親を思ふ誠心より發揮し來りたるに外ならず。忠臣を孝子の門に求むとは、則ち此の事なり。一の善行は、總ての善行を豫測す。而してその最も手近きは、父母に對する孝養を以て最初と爲す。

孝養の大切なると、而してその百行の本たるとは、今更ら吾人が細說する迄もなし。然らば如何にして孝養をなす可き乎、抑も孝養とは如何なる事を意味する乎。

彼の從來二十四孝杯と申して、恰も孝養の手本の如くもてはやすは、概して變則の孝養にして、決して中行を得たるものにあらず。二十四孝流儀の孝養は、父母が無理無法なる注文をなすに、何の不平もなく、不滿もなく、温順慇懃に之れに奉事するを以て、その本色

となせり。されば父母にして不慈ならざれば、子として孝子となる能はざるが如き、恰も君にして暴君たらされば、臣として忠臣たる能はざるが如く、寔に以て不都合千萬と云はざる可らず。雪中の筍、氷裡の鯉、子を埋めて黄金の釜を堀り出す抔とは、何れも人倫の平正を壞りたる慘狀にして、決して常經となす可きものにあらず。

抑も眞正の孝養とは、別段四角張りたるものにあらず、角立ちたるものにあらず、六ケ敷ものにあらず、父母慈愛にして、子孝養し、愉色婉容、一家恒に春風の薰ずるが如きもの是れ也。忠臣たらんが爲めに君を暴君たらしめ、孝子たらんが爲めに、父母を不慈の親たらしむるは、大なる心得違ひと云ふ可し。吾人が今斯ることを繰り返すは、從來世間の流弊に就て、深く鑒みる所あればなり。

孝養とは斯の如く、何の手數もなく、面倒もなく、唯だ眞情の發するまゝすら〳〵と、さら〳〵と流露せしめ、その行く所に行き、その止まる所に止まるにあり。

されば孝養の孝養たるは、その躰を養ふにあらずして、その志を養ふにあり。美衣美服を以て、朝夕奉事するにあらずして、その心を樂しましめ、その情を慰め、その意を愉ばしめ、その志を滿足せしむるにあるや、固より論なし。特に親たるものは、子を思ふと深切にして、『親を思ふ心にまさる親心』厚ければ、その志を養ふの第一は、我身をば親に安心せしむるより先なるはなし。感冒にてもかゝれば、大なる心配を親にかくる也、まして大病に罹る抔は、大なる不孝なり。『親在此身倘萬金』とは能く謂ふたる言葉かな。

扨て父母の志を養ふに就ては、唯だ父母の言ふまゝ思ふまゝに奉事するのみならず。成る可くは父母の智識上、思想上、心靈上に就き、己れが見る所、思ふ所、

信ずる所と情脈、氣韻の相ひ通ずる様になすと必要なり。既にその情脈、氣韻相ひ通ず、父子と云へば父子なり。知己と云へば知己なり、父子にして知己を兼ね、天倫の樂事此れより大なるはなし。

人の趣味は年齢によりて異同あり、人の思想は時代によりて異同あり。父母は老人にして、子は壯年なり、父母は前代の人にして、子は近代の人なり。況んや現時の如き、世運の激變に際しては、二者の距離は、更らに多く隔たらざるを得ず。されば今日に於て子たるもの、その父母の志を養はんとするは、決して容易の業にあらず。唯だ子たるものゝ職分は、面倒を厭はず、煩雜を厭はず、丁寧、親切、以てその父母の心を開導し、成る可く社會の新智識を分配し、社會の新思想を分配し、徐ろに從來の陋習を排き、以て眞個にその志を養ふ様あり度きなり。唯だ父母の謂ふまゝになし置くは、父母に孝なりと云ふよりは、寧ろ父母を欺くものと云ふ可し。併しながら何事も老人に處するには、徐ろに、靜かに、おとなしく、親實に、手柔らかに開導せざる可らず。徒らに開導に急なる時には、却て父母の志を傷け、恩を賊ふの大なるものとならむ。その手加減は、唯だ眞實に親に孝なる赤心によりて判斷するの外なき也。

論説

外戚につきての心得

外戚とは母方の親戚、若しくは妻の里方等、凡べて家の主人の系統をひかずして、外より來る者に緣聯せる親戚を云ふ。外戚と云へば、僅かに二個の文字に過ぎざれども、此中無限の意義あり。此につきての心得方の得失によりては、一家の盛衰興廢に淺からぬ關係ある也。

總じて母方妻の里方の親戚は、軟かき女性の手を經て來るが故に、父方の親戚よりも、其の家の子女に親しみ易きもの也。例證は遠きに求めず、各自の身の廻りを省みれば、此事實歴々として見るべし。是れ何故となれば、外戚は兎角其夫の家に對しては、常に機嫌を取るの傾あるが爲に、子女は其の方に傾き易き也。また夫の父母とは異なりて、多少、其夫の家に對して無責任なれば意に投じ易き事を云ふものなり。また常に夫の家にありて子女に小言を言ふこと、夫の父母の如くならず稍々なれ易きの感あるが故也。故に大抵の家にては、外戚の勢力は案外に強よきものにして、遂には、其子女をして夫の父母よりも寧ろ外戚を重ぜしむるに至るもの多し。是れ決して嘉みすべきものにあらず。

外戚の方には、必ずしも其女子を嫁せしめたる家を、我が儘にかきまはさんと、初より心がくるにはあらざるも、其子女が己を重んじて、萬事其命令をきく樣になれば、自然と其內事に干渉する樣になり、遂には夫婿の家事を、己に相談せねば、不愉快を感ずる樣に至り、到底、其夫婿をして、二人の父、二人の母を戴くが如き、苦境に陷らしめずんば已まざるに至らん。且つ女性は千有餘年の習慣より、脫する能はず、大抵の婦人は夫の家よりも、其里方を重んずるの心失せずして、不測の禍をかもす事あり。新聞紙上に毎々散見する醜事、即ち其里方の弟、兄が、其良君の財を掠すむるを傍觀するの心事は、即ち英傑政子の如きものをして、北條氏の爲めに、源氏を傷くるも、辭せざらしめたると同じく女性の弱點たり。是れ實に外戚たるもの丶、よく／＼謹まざるべからざる所、夫婿たるものの深く考へざるべからざる所也。

近年親子別居論を唱ふる人多し。是れ家庭をして、常に健全愉快ならしめんとの策なるべし。然れども其半

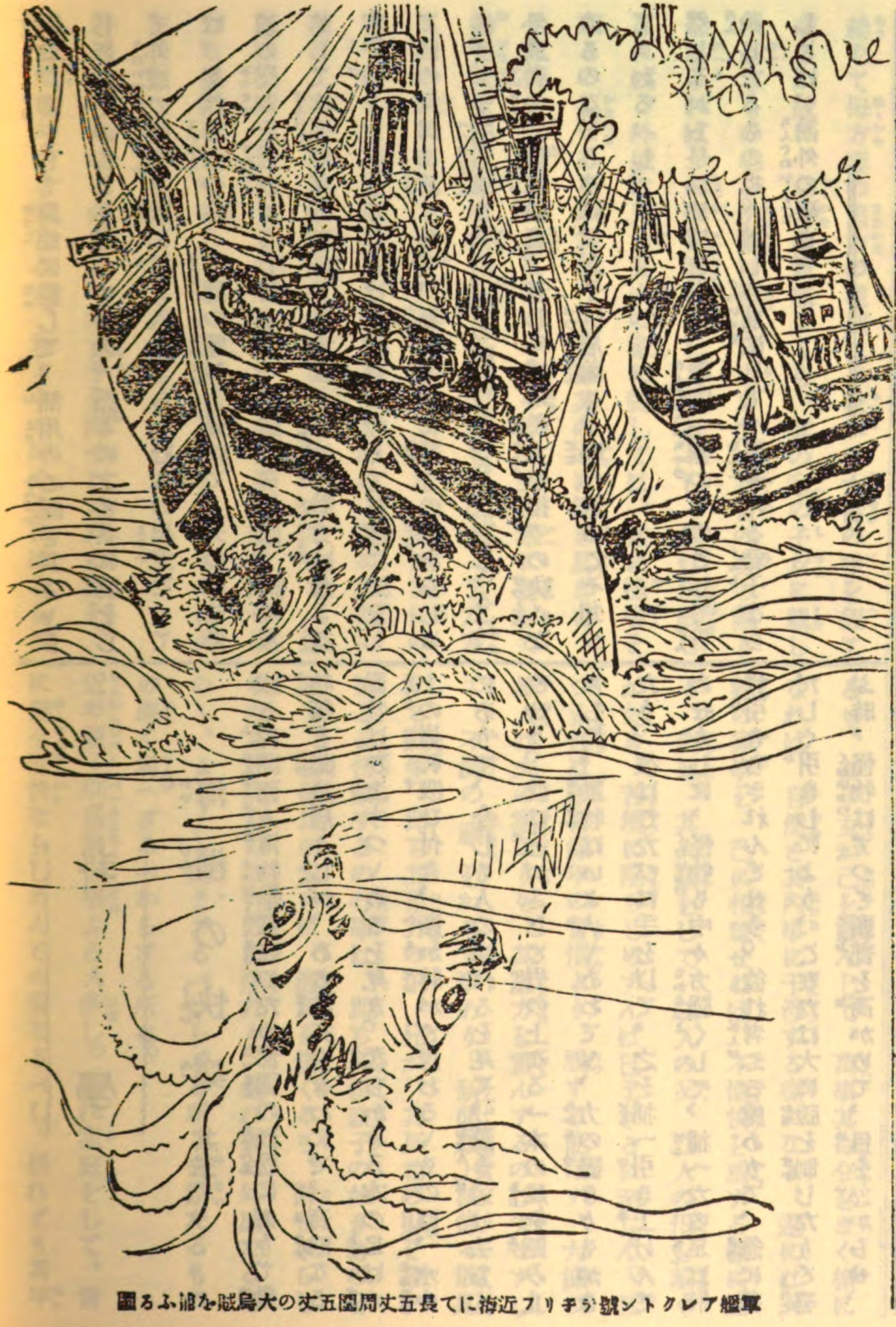
面は、妻をして舅姑に對して、無用の心配を爲さゞらしめんとの心より出るもの也。然るに之と共に妻をして外戚の威權を家に引き入れざらしむるの要意なくては、是れ妻女のみ、舅姑の壓制を免れて、夫のみは外戚の壓制を免れざらしむる也。何故となれば、夫の家にして本系の父母なからしめば、外戚の勢力は愈よ益す手強よく入り來るべければ也。此くては遂に夫をして己の父母に薄くして、妻の父母に厚きの譏あらしめん。父子別居論と共に、夢の間にも忘るべからざるは、外戚勢力、拒絶論也。若し外戚の勢力を拒ぐの決心なきものならしめば、父子別居論も、唱へざるこそ却つてよかるべし。

然しながら是れ外戚を以て、尋常一様のものとして言論したるもの也。若し外戚にして、温平たる君子ならしめば、論外の事也。

科學

海濱の快樂 其三

或る佛蘭西人博物學探究のため佛國の海邊にありて動物等を集め居りしが、ある波打ちきわにて、奇態なる動物はひ上りつゝあるを見き。柔らかき八本の足は水上の岩に吸ひ付き、頭か躰かと思わるゝものは、水中にありて、今しも人の來れるを見て、驚き逃げ去らんとせり。彼は逃がさじと岩の上なる一本の足を踏み止めしに、動物はいよ〳〵あわてゝ、力の盡きりもがきたり。彼はこたびは手を以て、之を捕へ引き上げんとあせりしに、怪物も中々力強くして、捕へたる足は將に引きちぎれんとせり。彼れ考ふる處ありて、急に甚だしく引きしにより、こなたは大に勝を制したりと喜ぶ時、怪物はずつと頭部を高かめて、目を怒からせ、

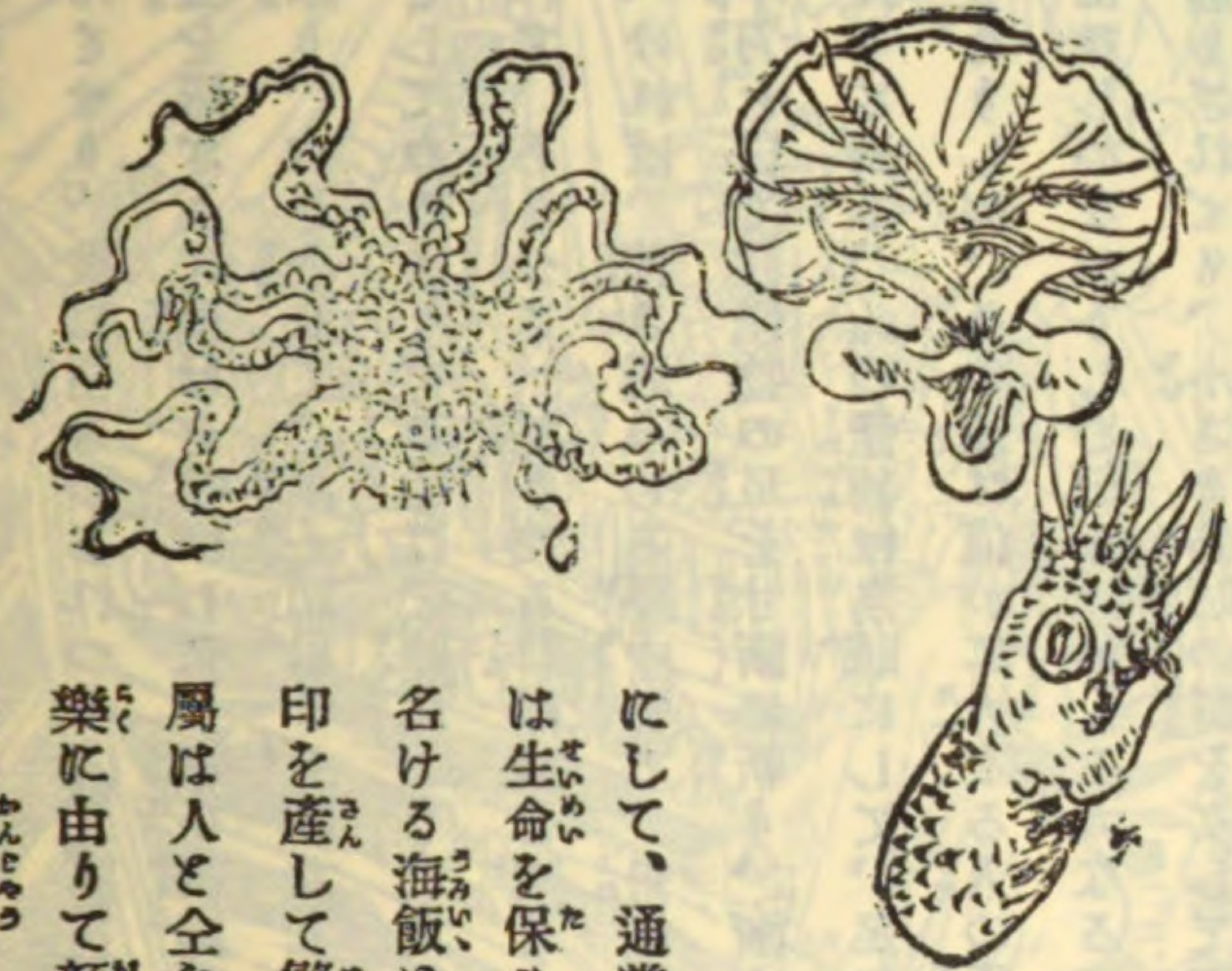


軍艦アレクトン號がテネリフ近海にて長五丈周圍五丈の大烏賊を捕ふる圖

泡をふきつゝ、ばさりと云ふ水音と共に、今迄岩に固く吸ひ付きたりし五本の足を放して、同時に彼の襟くびに取りつき、ずる〳〵と岩の彼處の水底に引き込まんとせり。彼は引きづられつゝ、僅かに岩にすがりて、聲を限ぎりに助けを呼びしに、幸ひ彼處より友人走り來り、力を合せて、漸くに引き上げたりしに、ひやりとしてぬる〳〵する手は、陸に上りても尙ほ彼より離れず、あまつさへ怒りたる口は彼を嚙まんばかりに見へければ、怖さ恐ろしさ夢中にて、舟に迄走り行き、小刀を以て、怪物の足を寸斷に斬り、漸くに離つを得たりと云ふ、此の怪物は烏賊にして、足の長は四尺餘もありしが、その頭は僅かに大なる人の手を握りたる位ひしかなかりしと云ふ。かゝる大なる烏賊は多くは居らざれども、小さき烏賊の群をなして海中を遊泳するは、海水浴客の屢々見る處なり。

烏賊屬は、洪水前の動物の一種にして、古代の肉食動物に、他を嚙み殺ろすものと、吸ひ付きて殺ろすものの二種ありしが、烏賊屬はその一なり。余等は今日も化石の中に、烏賊の嘴の二尺餘もあるものを見るとあり。彼等がその昔し如何に大きくして、如何に勢を逞ましくせしかを計り知るべきなり。かゝる大なる動物も小さき時は人間の食物となり、或は他の魚を釣するに餌さとなさるゝ也。

烏賊の種類は三十餘種ありて、或は蜘蛛の如きもの、或は袋に足の生へし如きもの等、様々あり。その大さの如きも、一寸にもならずして終る者あり。或は五丈の大に至るものあり。我等若し精密に監察する時は、種々の面白き様を見ん。老ひたる烏賊屬は通常水面の下、僅かに數尺の處にある岩の間に、二三の足を以て吸ひ付きては、身を支さへ、他の足を以ては近邊に近ける餌を取りて食す。都合の好きはその足なり。その足を以て、手の用も、足の用も、水泳するひれの用も、



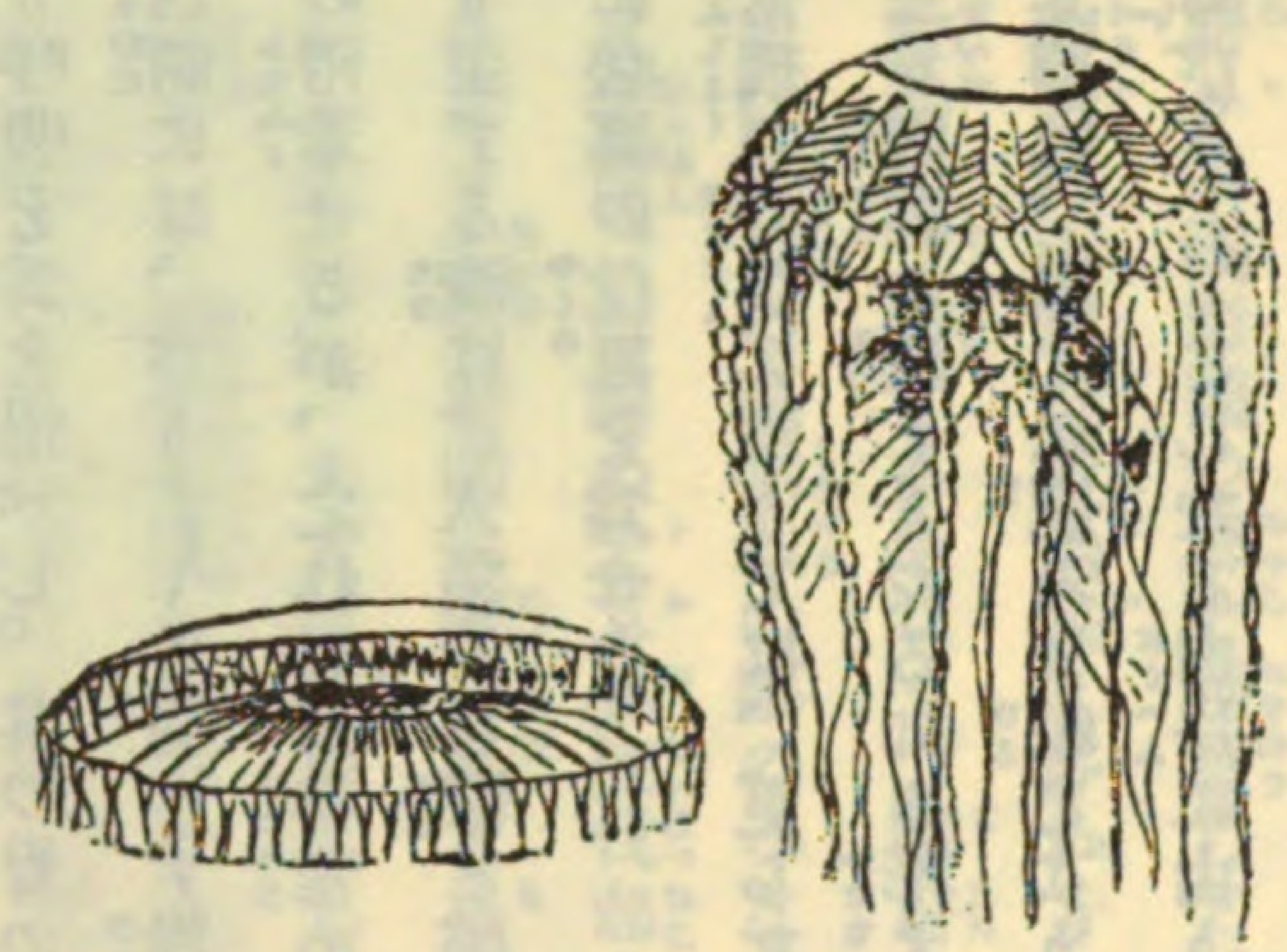
共に兼務せり。足には通常二列の猪口の如きものありて、物に吸ひ付くに便にせるが其の數は、一本の足毎に二百四十個あり。其食とする所は、多く小動物と貝類にして、通常五六年の間は生命を保もち、舟子が名ける海飯と云ふ房形の印を產して繁殖す。烏賊屬は人と全じく、喜怒哀樂に由りて顏色を變ず。人は感情によりては赤くもなり、青くもなるが、烏賊は怒りたる時は、斑點を生ずるは、余等が之を捕へたる時に見るを得べし。烏賊屬にとつて最も都合の好きと三つあり。一は其足の一本なり二本なり失ふたる時は、暫時にして、新らしき足生へ出でゝ、元の如くなると。二は烏賊の墨と稱する者ありて、敵におそわれし時は、之を吐きて逃ぐるとなり。陸にも上れは、水にも泳ぐを得るなり。烏賊の墨は水書等の繪具に製して、最も良きものを得べし。

水母

暴風雨の朝、海濱を散步せよ。綠がゝりたる糊の塊の如きもの、彼處此處の濱邊に上れるを見ん。これ水母なり。目を翻して海上を眺むれば、玉の如きもの鐘の如きもの、蝙蝠傘の如きもの、もしくは笠の如きもの、群を爲して流るゝを見ん。これ生きたる水母なり。もし水母をして云ふべき口を持たしめんには、親はその子に教へ、子はその孫に教へて云わん。この世の中に最も恐ろしきもの二つあり。一は風波にして、一は鯨なりと。そは水母の生殖する目的は、殆ど鯨の

生長を助けんがためにして、鯨一度口を動かさば、數十百區の雲母、一時にその口中に含まれて、鯨の腹を肥やすの用をなすが故也。

昔しは水母を以てたゞ一の糊の如き、汁の塊まりたるものと成せしが、近年に至り、愈々科學の開け行くに隨たがひ、その意外に精密なる構造組織なるものなることを知るを得たり。



上圖は通常の雲母の一二を示めせるものなるが、傘の如きものゝ下の中央に口あり。口は大低休みなく、食物を取りて、下にある袋の如き胃に送りつゝあり。身躰の柔かくして、見かけの割合には、食を貪ぼる動物にして、一たび餌を見付くる時は、好きも、悪しきも、多きも、少なきも、撰ぶとなく、たゞ一口に之を含む。含みたる上は、その餌の騒ぐにもかゝわらず、躰を水上に浮かべて、更らに動かず。擒とせしものゝ全く死するを待ち、始めて之を胃中に飲下すを常とす。或る人牛乳を之に飲ましめしに、管を通りて腹中に下る處を、あり〱と見るを得たるより、水母に付きて一層のくわしき研究は爲されたり。

水母の大なるものは、二尺四寸餘の直徑あり。多くは夜中燐光を放つを以て、その在りかを容易に知るを得べし。人過つて躰を之に觸るゝとある時は鋭るどき傷みを感じ、その觸れし處は、一面に赤く腫れ、最も先きに、白き處を生ずべし。これ水母が怒りて、刺せしものと知るべし。

水母は殊更らに口を以て呼吸を爲さゞれども、止み間なく、体を擴げつぼむるの作用によりて、躰の氣孔よ

り呼吸を爲を得べし。其の胃の中を解剖するに、胃の内側には、ぴり〳〵と絶へず動きつゝある無數の肉片の附着せるが、之れには非常の電氣あり。又た胃中より生ずる液は、人類の胃液と等しく、食物を消化するに必要の役目を爲せり。

繁殖の方法に至りては、更らに奇態なる者なり。卵は三ッ圓躰の集まりたる如き形となりて、產み落され、其卵は、漸くに圓ろき蛾となり、一所凹みたる外、全躰ぴり〳〵としたる肉片に由りて包まれて、水中を遊泳し始むむ。四十八時間の後に至れば、運動は漸々甚だしくなり、先きの凹みたる所を以て、或る固たき物躰に吸ひ付き、それよりとろ〳〵としたる粘液躰となる、粘液躰はだん〳〵形を變じて、圓柱形となり、圓柱形は更らに幾個にも分かれて、分れたる部分、各々一個づゝの水母となる。

海中には驚くべき怪物多きが中にも、下等動物程奇態にして不思議なるものはあらじ。水母の如きも未だ博物學者が發見し得ざる幾個の秘密は、その中に隱れ居らん。注意して觀察せば、古よりの學者の遺せる秘密を發見するとなしとも云ふべからず。

史談

歐洲政界の三女傑

當時歐洲の政治界に於て、陰に陽に其勢力を振ふの婦人固に少なからず。今假に其三人を抽き、左に肖像と共に畧傳を掲げ、一斑以て全豹を覘ふの便りとなさむ。

* * * * *

一、無官の露國全權大使　（ノヴイコフ夫人）

世界列國の中に於て、幅員と云ひ人口と云ひ人種としての力と云ひ殆んど上らず下らざるの間にありて、久

しき昔より互に相睥睨し、稍もすれば衝突を來す尤も彌縫し難き英露二邦の間に往來して、無官の露國全權大使とまで稱せられたる婦人あり。ノヴイコフ夫人は是なり。

夫人は露國の門閥キーレツフ家の女、故ノヴイコフ中將に嫁せり。其初めは位置財産才力閑暇のあるにまかせて、極めて隨意閑散の生涯を送り、讀書交際の外、時々歐洲諸國の都を歴遊して、上流社會に來往せり。其交游の中には政治家も多かりけれとも、夫人は殆んど政治に干繫する所なく、嗜好する所は文學、關係する所は社交の事宗敎の事のみなりき。然るに今を距る十八年前、露國の土耳其征伐起りし時、夫人の愛弟キーレツフ大佐全國に轟く名を揚げて花々しき討死を遂げたりければ、夫人は初めにして不可慰の悲傷に沈み、終にして慨然發憤して吾も弟の國の爲めに斃れし如く國に盡し名を揚げむとの志を起すに到れり。

斯くてノヴイコフ夫人は優々たる閑生涯より、一轉して愛國者の多忙の生涯に入りぬ。第一に先露國の土耳其征伐を行ふについて、尤も妨碍をなすの虞あるは、平生蛞蝓と蛇の間柄なる英國なり。英國の人心は常さへ露國を忌み疑へるに、當時政府の上に立つたる者は露國嫌ひとして有名なる保守黨首領ビーコンスフイルド伯なり。英國に於て露國と連衡の説を懷くものは、唯自由黨、自由黨の首領にして當時政界を退隱しハワアデンの書齋に引籠れるグラツドストーン氏あるのみ。ノヴイコフ夫人は曾て英國に遊んで、虞氏と一面の識あり。夫人即ち書をグラツドストーン氏に寄せて其愛弟の死を訴へ、英國の非露主義の燄なるを慨し、英國の輿論を一變し土耳其を討つの聲援をなさんことを請ひぬ。一週の後、グラツドストーン氏が土耳其の亡狀を鳴らせる著名の小冊子「ブルガリアの慘状」の一篇、ノヴイコフ夫人の手に達せり。蓋しグラツドストーン

氏の露英連衡論は、ノヴイコフ夫人を待つて成りしにあらざるも、夫人の苦言痛語はまた氏を動かしたる一の動力たらずんばあらざりしならむ。



ノヴイコフ夫人

是れより夫人は一生露英の間に立つて、二邦合從の策を立て、露國の利益を衛護せむと、其良人を莫斯科府に殘し置きて、單身飄然として英京倫敦に乘り込みたり。時は斯る企望の實行に尤も不利の時なりき。政府には保守黨立ち、肝腎のグラツドストーン氏は野にあり。全國の輿論は露國を疑ひ忌みて、主戰論の響さへ聞へたりき。然るに此大膽不敵の婦人は、敵國の本城敵論の中心に乘り入り來つて、其旅館に優々と居を構へ、公然たる官命爵位を帶ぶるにもあらず、萬金を散じて人心を結ぶの富あるにあらずして、或は自由黨の諸名士を說き、或はタイムス、ポールモールガゼツト諸新聞に投書し、或は論文冊子を公にし、或は露國の冊子を飜譯紹介し、或は自由黨を助けて保守黨政府の顛覆に盡力し、陰に陽に手の屆く限り舌の續く限り筆の動く限り百方手段を盡して露國の利益を保護したり。或人曾て夫人を評して曰く、彼女は英露の爭に於て、一身の力能く十萬の精兵に優る程露國を强ふせり」と。

爾來玆に十八年、ノヴイコフ夫人は常に英露二國の間

を往來して、事毎に露國の利益を防護せり。假令如何なる事によつて他邦にあるも、英露の間に一問題起る毎に、夫人は飄然倫敦に來つて筆舌を自國の爲めに勞す。此を以て夫人は露帝の女探偵と目せられ、グラッドストーン氏を初め他の露國を惡まざる自由黨中の諸士は皆此妖婦の嬌舌に翻弄せられて愛國心を失へるものと或一派は罵り、夫人が倫敦の旅館は船を沒し人を溺らすサイレンの窟に比せられ、夫人の事につきてはさま〴〵の風説取り傳へられ、自由黨の外交政畧は英京の中央に居を構へたる露帝の密使たる美人の舌頭より織り出さるゝかの如く評判し、あまりに夫人の評判高かりければ、或自由黨の名士の如きは夫人に説かれたりとの蔭口を厭ふあまり夫人より面會を求めたるも二十回まで之を刎ね付けたることありしと云へり。英露の衝突危急に迫りし時、或貴婦人の言ひけるは「若し宴會の席にて話の種の衰ふることあらば、唯ノヴィコッフ夫人の名を一唱せよ、一坐の注意は愕として忽ち來らん」と。

十八年の事業は無官の露國全權大使の名をノヴィコッフ夫人に與へぬ。官職爵位も大なる富もなき夫人も天晴英露の間に屈指の人物として鳴り渡り、英國に於ても其交遊する所はグラッドストーン氏ハアコルト氏等を初めとして歐洲に名ある秀拔の人物にあらざるはなく、故カーライル、飛將軍スコベレッフの如きも大に夫人を推奬せり。今日に於ても夫人の露英問題に關する一言一句は何人にも謹聽せられ、何人も此纎々たる一女子の力如何に露國の爲めに長城の功ありしかを知らざるものなし。其の姓名の首文字なるO・Kの名を以て度々英國新聞に公にせられたる投書は、有名なる「露西亞及英國」の一篇に集められ、グラッドストーン氏の如き親ら之を批評して盛に其識見才力を賞揚せり。其他夫人の手に成れるもの、「スコベレッフ及

スレーヴ主義」トルストイ短篇小說の英譯、其他時事問題に關する寄書論文幾十篇あり。一身を以て外交家たり、文人たり、小冊子の作者たり、また一種の新聞記者たる夫人十八年の事業を見來れば、實に男子も亦慙死す可きものあり。

＊　＊　＊　＊　＊

二、佛國新聞界の女王　（アダム夫人）

佛國古來政治に干繫せる名婦人多し。牧羊の杖を棄て、劍おつ取り佛國の社稷を倒れむとするに救ひし田舍少女の事は更にも言はず、國王を操りて革命の種子を播きつけし後宮の寵姬はまた之を措き、ローラン夫人スタアル夫人を初めとし、擧げ來れば殆んど其煩に堪へず。今日に於て其形を存せるもの、佛國近事評論の主筆ユリア、アダム夫人、即ちマダムアダムとして歐米に其名轟く婦人に於て之を見る可し。

アダム夫人の生涯に就ては、多く語る可き所なし。夫人は多感多情才力敏活なる佛蘭西の女として生れ、國家多事の間に自然に今日の資格を養成せり。曾て佛國近世のヂオルヂイリオットとも云ふ可きヂオルヂ、サン女史につきて文學上の薰陶を受けたり。然れども夫人をして今日あらしめたる者は、佛國の獨眼龍ガムベツタ其人なり。ガムベツタの佛國に於ける、猶ビスマアクの日耳曼に於ける、グラッドストーンの英國に於ける、故ブレーンの米國に於けるが如く、其肩は高く一國の上に秀で、恰も城頭の喬木先づ遙に望むで城を知る如く、其人を見て其國を知る可き巨人なりき。其日耳曼より受けし恥辱を雪がむとする一念は烈火の如く一國を燃やし、其片眼の猶瞑せざる間は、日耳曼の老鐵公をして半宵夢しば〳〵驚かしむるものありき。アダム夫人ガムベッタの友人として秘書官として始終其側にありき。其の受けし影響の如何なりしかは

亦以て想ふ可きなり。然も夫人は他の呼吸によりて纔かに其形を保つ空球の如きにあらず。ガムベッタ巳に逝くも、夫人の人物勢力、識見筆鋒は、愈上れり。今日に於ては、歐米諸國婦人の記者に乏しからずと雖ども、他の識見筆力を以て鳴る男子と旗鼓堂々相當るの婦人を求めば、先づ第一指をアダム夫人に屈せざる能はず。夫人の主筆として一切を擔當する近事評論は、佛國の新聞雜誌の中に於ても、尤も有力なるものゝ一也。埃及問題起る、英佛勢力の消長を論ずるの雄篇は、直ちにユリヤ、アダムの名を以て出づ。アルサース、ローレンスに事あり、烈火炎々筆下雷起る慷慨なる文章は、直ちにアダムの名を以て出づ。筆力識力、今日に於て殆んどアダム夫人の右に出づるの婦人なきを見れば、佛國に名婦人の血統絶へたりと云ふ言の誤るを知る可き也。



アダム夫人

*　*　*　*　*

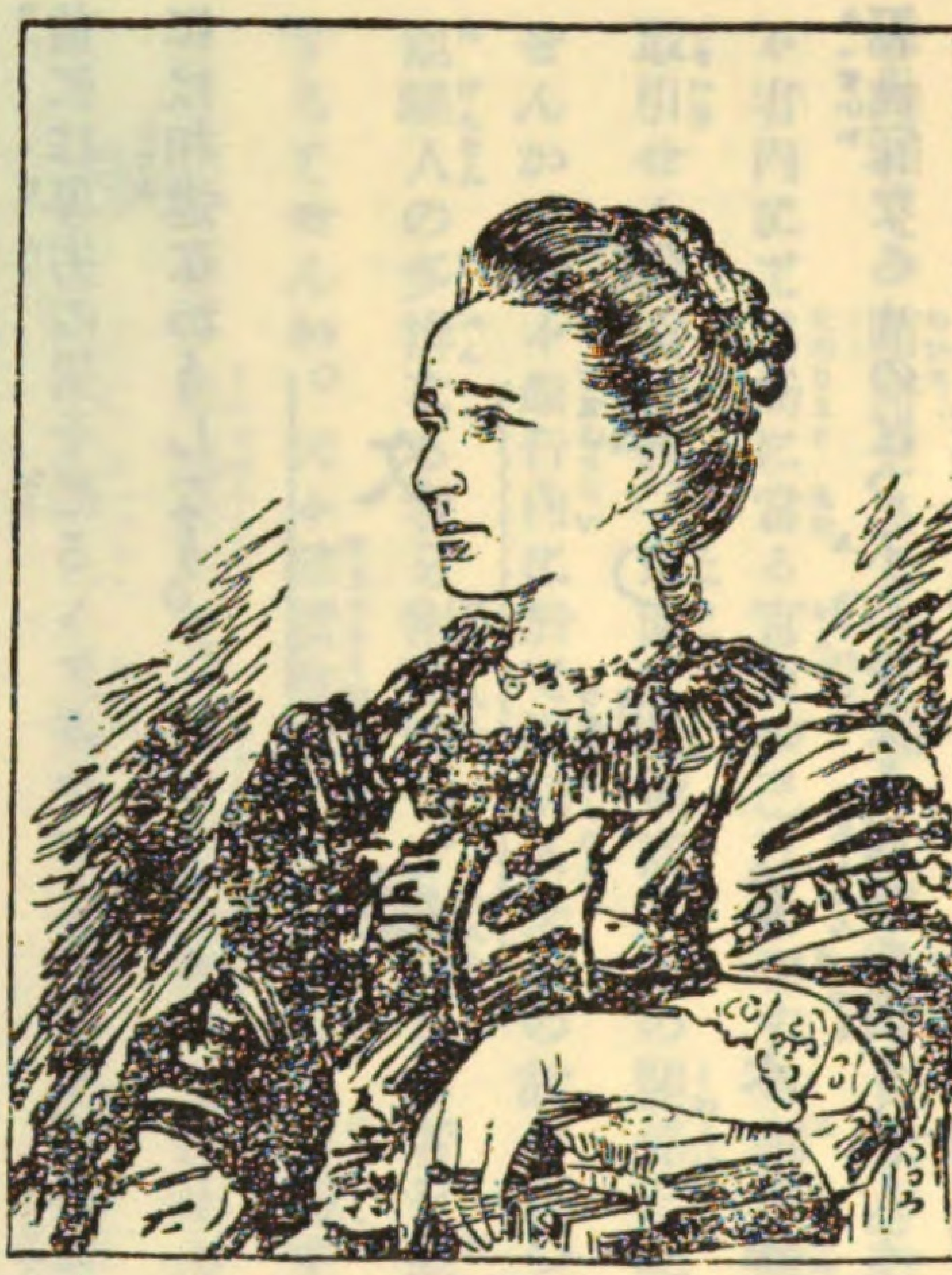
三、英國女權論の勇將　（フオセット夫人）

フオセット夫人の名は、尤も早く我國に聞へたるものゝ一なり。其の婦人參政權の主張者として、達筆の論文家として、明快なる小經濟書の著者として知られたるは、最早新しからぬ事なれば、唯少しく其一生の畧歷を叙するに止まる可し。

フオセット夫人は英國の田舍アルデベリーの一紳士ニウソン、ガルレット氏の第二女なり。幼にして二三年近隣の學校に學びし後は、歸つて家にありて、其父母の許せるまに／＼文學書を讀み政治談をなせり。一日姉妹椅子を並べて、姉はセーキスピーア集を持ち、妹は襪の綻びを繕いつゝ、「オセルロ」の劇を評し合ひ居たりけるに、丈高き青年學士ツカ／＼入り來り、爾少女の批評を聞いて愕然其の見識の高きに驚けり。襪を繕いながらオセルロを評したる少女は、此青年學士未來の盲士フオセット氏の夫人なりき。

ミリセント、ガアレット孃二十歳にして、硬骨精識の盲士フオセット氏の夫人となり、爾來氏が多事の一生を通じて其の光となり杖となれり。良人の大學教授として經濟學の論文講義を綴り經濟書を著はす時は、夫人の爲めに材料を集め筆記をなし注意を加へ謄寫をなし、天晴の好著述たらしめたり。良人が國會議員とならんとするや、馬を驅つて撰擧區を乘り廻はり、其の當撰の爲めには身を惜まずして働き、數度の失敗の後漸く當撰するや、夫人は日々良人の手を引いて其席に着せしめ、自ら傍聽席上にあつて討論の終るを待てり。良人終にグラッドストーン氏の爲めに撰拔されて驛遞總監となるや、夫人は夫の手となり眼となり山なす事務を爲めに整理して、其良人をして有益なる改革を爲すを得せしめたり。フオセット氏が其妻と同じく女權論者なりしも怪しむに足らず。曾て撰擧爭の最中、

夫人が落馬絶息したる時、硬骨剛腸を以て有名なる六尺の偉丈夫が小兒の如く哭したるも、亦怪しむに足らず。



フオセツト夫人

英國の名士某嘗て歎じて曰く、余は數多の演說を聞きたれ共、未だ或一婦人の政談演說程好き演說を聞きたることゝなし」と。此一婦人は即ちフオセツト夫人なり。

夫人の文壇に於て演壇に於て如何に氣焔を吐くかは、何人も知る所なれども、斯の男子を凌ぐ婦人は、小作りの優美なる一淑女にして、清素の服おとなしく着なし、明瞭なる低音を以て靜肅に演說する一點輕噪浮華の風なき婦人なることは、或は知らざる者あらむ。其の演說するも好んで演說するにあらざることを知る者は或は少なからむ。其頭腦數學的に明瞭にして、議論精勁、意志强固なることは何人も知ると雖ども、其の曖昧を忌み非理と懦弱を惡むことの甚しきは、何人も知ると雖ども、夫人が慈愛の母たり信愛の友たることは知る者は少なからむ。其經濟書の著述、議論文等の作あるは何人も知れども、其著作に「ヂヤチー」と云ふ小說ありて、昔は女詩人を以て自から期したるとありしを知る者は多からざらむ。其の文學美術演劇を好み、尤も裁縫に長じ、非常の早足にして尤も野外の漫步騎馬園藝を好み、夕方には目のまわる程速やかに編物を

なしつゝ人に書讀ませつゝ聞を樂むとは知らざらむ。剛骨の名士故フオセツト氏の妻、カムブリツヂ大學の數學試驗に第一等の其上に位せしフイリツパ孃の母、女權論の勇將、經濟書の著者、其の冷靜鋭利なる眼の前には卑劣の男子恐るゝフオセツト夫人も、畢竟婦人には相違なかりしなり。

文藝

家庭の罪

寛水生

厭世家なるものは、不愉快なる因縁の積り〳〵て、不愉快なる第二の天性を成したる人を云ふ、是れ誰れもよく知ることにて、今更喋々するを要せざることなれど、此ごろ學者社會の問題となれる「社會の罪」てふ語は其意味あまり廣きに過ぐるやうなれば、今少しく區別して說きたき節なきにあらず、

蕎麥を好む人にても、一度蕎麥にあてらるゝ時は、三年間も五年間も蕎麥を見る毎に嘔吐を催さんとする事あり。己れが困窮凍餓に逼りし時に耳に入りし聲は、如何に淸く朗かなる音樂の聲にても、終身これを聽く毎に不愉快の感を引き起す例あり。一たび中仙道の旅行に、酸苦を嘗めたる人は曰ふ、中仙道ほど、イヤな處はなしと。一たび新聞屋と呼び捨てにせられて、不愉快の感を爲したる新聞記者は曰ふ、世の所謂貴顯なる者に接するほど、イヤな事はなしと。

されど以上の例の如きは、尙ほ輕き淺き因縁に屬す。故に此等の人に向つて、足下は神經質なり、羹に懲りて膾を吹くものなり、度量あまり狹からずやと、責むるも承認せざるにあらず。

すべて廣き社會は公平なり、たとへ少しの誤解若しくは偏頗ありとも、これ何人も免れざるの例なれば、先

づ／＼平等と云ふて可なり。その區域の狹くなるに隨ひて個人に及ぼすの影響漸く強し。故に社會の罪と云ふものは、日本の社會、東京の社會と云ふ如き廣漠なる處よりも、部分々々に存在するなり。例へば何々省の内にて、賄賂をもて人を擧ぐる事ありとせんか。何々省内にて其局に當る官吏が己れを利する御用商人と取引せんが爲めに、正直なる前商人との關係を絶つとせんか、何々銀行内に於て同縣人多きの故を以つて、他縣人の多辯なる者を等閒視し、沈默なる者を無能視するとせんか。何々紡績會社にて、貧女を虐使するとせんか。何々活版所にて、職工を束縛するとせんか。是れ明かに精神的殺人を意味するなり、是れ社會の罪にあらずして何ぞ。

されど斯く殘酷なる社會の罪も、家庭の罪に比ぶれば倘ほ輕し淺し。純白無垢なる嬰見の心鏡に、不幸なる家庭の黑影を映ぜしむれば、幾度これを拭ひ去らんとするも能はざるべし。これを江漢に濯ひ、これを秋日に晒すとも再たび元の純白には返らざるべし。バイロン、ルーソーの徒は皆な是れにあらずや。世の家庭を有する者は、畏れて又た畏れ、愼みて又た愼むべきなり。

「家庭の罪」に就ては倘ほ細説を要すれども、國民之友第二百二十七號の社説「人倫離」なる一篇は、家庭の罪を細説して餘蘊なければ、吾人は彼の社説を借りて責を塞がんと欲す。

一家の礎

筑峰女史

貴賤上下の區別なく家政を司どる主婦其の者の重任は、大藏大臣なれば、中々に油斷ならざる責いと重く、兎角一家の零落繁榮は皆主婦の責を盡すと否と即ち家政の整不整による者なり。今日目前相應に生計を立て居るとも、家政と丶のはざれば早晩貧苦になやむべし。大概男子は外に出で丶種々の事業をなすを專務と爲せ

ば、いかに行屆けばとて家の内の事までも爲し難ければ、そを助けいたわり、家内の事に心配なからしむるは、主婦の任なり。家政の完全なるは一省の事務のよく擧ると同じ、次官とも見なすべき主婦の仕方によりては働く者も怠りがちとなり、又は怠り者も役立ちぬべし。實にたゞ家政とていともたやすくは云ひ侍れど、中々に六つかしき事こそ多かんめり。第一に大切なるは無駄つかひを省き、收入金を積み置き、少しづゝにても銀行になりあつけをくを例とせば、手數の樣にはあれども自づと大ていの事は見合せがちとなる故、自然と節儉をする事となりぬべし。又不用の金錢を家にをく時は盜ぞくのうれへもあれば、大なる心配の種となるのみかは、銀行より製造局へ貸付られ多くの職工などを養ふの料ともなりぬべし。又子弟等の教育とても中々骨の折るゝ者にて、凡そ子供は學校よりは家にある時間の方多く、その間とても多くは母の膝下にあれば、よきも惡きも母の擧動のほか耳にし眼にふれ侍らねば、母の仕ぶりには知らず／＼感染し、其のをさなき時に感じし事はいつまでも消え難ければ、母の仕ぶりは大なる影響を及ぼすもの故、實に主婦たる母が常々の行ひこそ愼まずしてやはあるべき。さき頃わらは知べを音のふをりから、主婦にま見へ侍べらざるに、其の子の出で來しが、その立ふるまひ禮儀ありてをとなしきに感じ入り、その母上のさぞかし秀でたる方ならんと想ひしにたがはず、應對より子供の取扱まで、一點の打ち樣もなきまでの賢夫人にてありけり。次に難きは下女下男の使ひ方にて、弛め過ぐれば主家を侮どり、嚴に失すれば之を怨み、實に中庸ほど得難きものは世にあらねども、緩嚴のほどよき所にて使用し、情け深く愛憐の眞實もて教へ導き、賞ばつを正しくすることきん要なれ。終に夫に對す行ひは最も愼むべきことにて、妻のあしらひ惡しければ自づと我

家よりは外々の所面白くなり、品行もみだれ、失費も多く、家の衰亡ともなるべければ、家の内を樂しくして夫を慰めいたはり助けはげまし、たゞ一節に其の職務に隨事する樣に仕向くるこそ、げに良妻の心掛くべき事なりかし。これにつけても料理洗濯掃除なんどに心を用ふるこそ大切なるべけれ。さて主婦の仕事には種々の難き事のみありて、細やかなる事まで數へ立てなば、日も盡きぬべし。されど今まで申し侍りし事だに完全に出來なば、家内安樂繁榮はうたがひなかるべしとぞ思ふ。實に主婦の責任の重きは思ひの外なり。それこそ道理なれ、主婦は一家の礎とも見つべきものにしあれば。

袷羽織

月堂主人

下總なる余が從兄某君の令妻に、茂勢女といへる婦人あり。温順にして頗る才能あり。容貌はさのみうるはしからねど、心の美なるに於てはそのたぐひ稀なり。今年の三月の中旬、夕陽柳蔭に落ちて暮烟しづかに夜を迎ふる春の黄昏れ、茂勢女はかい〳〵しく其日の事を終り、やゝ灯ともす頃となりたれば、先ごろより感冒ひきて打臥せる母へ參らせんとて、夕餉の粥を炎はじめぬ。折から茂勢女の夫某君は歩を早めて來れり。急ぎ過ぎ行かんとして、俄かに茂勢女が傍らに立どまり、餘念なく爐に向ひて粥の炎加減を試みつゝある茂勢女をかへりみ「阿茂勢よ。余は近日商用ありて東京へ行くべければ、三四日のうちに余が彼の縞の羽織を直しおきくれよと」おごそかに命じたり。茂勢女はしとやかに「唯唯」と答へぬ。

茂勢女の夫某君は、義俠心に富める人なり。されど此人にして唯一惜むべきは、平素事を處するに過直なるがゆへに、おり〳〵家内の安全を亂し、家庭の平和を

破ることあり。茂勢女嘗て余に語りていへり「若も妾の夫に癇癖なかりせば、棘なき薔薇のごとく、悪からぬ雪のごとく、如何に妾にうれしくありつらん」と、其後日暮れ夜來ること三回にして四日目となりぬ。茂勢女は常のごとく朝夙く起き出で、妹、弟の二人を懇ろに世話して學校へ出しやり、續いて己が子の祐坊を幼稚園へいだし遣りなどして、此日の朝もあらましの用務果てければ、庭に對へる一室に入り、ほどよき所に坐を卜めて徐むろに針仕事を始めけり。

障子越しに聞く鶯の聲のいと長閑なれば、自から心ゆるみて眠りを催したりけん、茂勢女は其まゝうつ臥してしばしまどろみぬ。時しも後の襖ひらく音しければ、茂勢女は驚きに夢をやぶられ、誰にやあらんと回首みれば、夫なりき。「何ぞ御用にや」と尋ぬれば、「否」と答へて歩をすゝめ、茂勢女が縫ひかけし幼子の羽織を見て、俄かに思ひ當れるごとく、「余が羽織は」と偶然問ひかけたり。

「余が羽織は」の一問に、茂勢女はいたく打驚き、膽つぶれて顔色たちまち變れり。「如何せしぞ、余が羽織は、斯程かたく賴みおきたるに」と云ふ聲は早や癇ばしれり。茂勢女はいたく夫の癇癖を怖るゝものから、いよ〳〵胸のみとゞろきて頓に言葉も出でず。某君はます〳〵いら立ち「未だ彼羽織は出來ぬにや。出來ざれば出來ぬでよし」とあら〳〵しく云ひ放つ聲の下より、茂勢女は泣が如く祈るがごとく「免し玉へ。免し玉へ。妾にあしき心は露ばかりも侍らねど、母上の御病氣やら、其他雜務多忙なりけるまゝ、つひおろかにも打忘れにき」「何、忘れたりとや。ソハ頓辭なり」「否、否〳〵。決して」「咄。言ふを止めよ。假令へ忘たりとするも余が明日東京へ行く事は、よも知らずと云ふことあるべからず」と頭から嚙みつくごとく罵る聲と共に、鐵拳忽ち茂勢女が頭上に落ち來れり。茂勢女は悲しきこゝ

に極まり、疊へヒタと泣き臥して、狂風に吹きおとされし胡蝶のごとし。

されど貞淑なる茂勢女は毫しも夫の暴行を恨みず、却つて己がふつゝかなるを悔ひ、只管ら夫の怒りを解くすべもがなと、ひとり思案に胸いためける。斯る折から襖ひらきて入り來る者あり。茂勢女が「誰ぞ」と問へば「文なり」と答ふ。

此阿文といふは、茂勢女が家の醬油製造藏を預る親方の女房にして、心やさしく忠實なれば、主人の覺えめでたく、特に茂勢女は深く信愛せり。されば茂勢女は大旱に雲霓を得たるごとくよろこび「オヽ阿文にや。よき所へ來りぬ。いま妾より御身の許へ行かばやと思ひ立ちけるところなりき。至急はかるべき事の出來たれば」と茂勢女は阿文を膝ちかく招きよせ、右の事情を物語りぬ。阿文は茂勢女の苦慮を察じやり思はず太く吐息せり。茂勢女はなほも言葉をつぎ「斯る事のおこりたるもすべて妾の罪なれば、たとへ夫がやさしく宥るしたりとて、神はゆるすまじと」袖に涙を忍ばせけり。やゝありて茂勢女は更に一段聲をひそめ「阿文よ。今話せる如く夫は明朝商用にて小島町の浦部樣方へ參るとの事なれば、いまより東京へ行きて湯島の伊勢庄(本鄕有名の吳服店)へ賴みたらんには、羽織一枚ぐらひは今宵のうちにも出來つらん、よつて明朝浦部樣方へ屆けおきもらひ、豫じめ浦部の阿鈴樣(緣の妹)へ事實を打明け、よきなに夫へ取りなし願はゞ、妾の道も立ち、夫の心も少しは和らぎつらんと思ふなり。阿文よ。御身は如何に思しつる」。阿文は實にもと深かく感じ「いつもながら優しき奧樣の御心かな。さらば遽ちに私が其お使に參るべし」と立たんとするを暫時しと止め、秘藏せる若干の金を與へぬ。

茂勢女は靜かに立つて障子をひらき、徐むろに庭前をながむれば、梅が香となかよき風邪音もせで、こゝろ

あり氣に鬢の亂れ髮をソヨ〳〵吹きぬ。

今日の日も亦た多少の梅花を散らして暮れたり。夜は來れり。春宵夢あたゝかならざるに、夜は果敢なく明けぬ。ア、一刻千金の春の夜も茂勢女には半厘の價もなかりつらん。

旭光閣にのぼりて諸鳥萬春を歌ふ聲の、敢て樂しからざるにあらねど、吾身何れの時か斯る樂しき春に逢ふべきと思へば、茂勢女は更に新愁一段を加へぬ。特に夫が面白からざる顏して出立するを見送りては心緒寸斷。

やがて車輪門を出るや轉々午前十時卅分頃某君は小島町なる浦部氏の門に着ぬ。出迎ふ人は鈴女なり「如何にして御出の遲なはり玉へしや。今朝ほどより待つゝありけるに」と云ひつゝ坐に案內しぬ。某君はいといぶかしみ「御身は如何にして、豫め余の上京を知れるにや」と眉をひそめて問ふ。鈴女は只だ片頰に笑めるのみ、何等の答へもせで奧の間へ入りにけり。程なく一枚の羽織を持ち出で來り「今朝ほど阿姊樣より阿兄樣へお羽織のお仕着せが屆き居ります」と某君の前へ差置きぬ。見れば小節糸織鼠萬筋のいと品よき羽織なりけり。某君はそれと悟りければ、いたく眞心に慚ぢて默然たり。鈴女はソッと膝押しすゝめ「阿兄樣。阿姊樣が萬筋の思ひを込めて、貴兄樣のお氣に袷羽織のお心づくしなれば、結ぼれし胸の紐解て、サゝ快よく召し玉へ」とすゝめつゝ、尙も事の次第を物語りぬ。

低頭沈思默々たる某君は、覺如として大に感悟するところやありけん、浮び出せる双眼の露は、眞心より眞情の光りをもたらし來りて、無聲の言を洩せり。

『ア、可憐なる茂勢女よ。余は大に過てり、余は何故に御身を暴打せし鐵拳にて、余が癇癪の虫をたゝきつぶさゞりしか。宥るせ、宥るせ。神の如き余が妻よ』。

家　政

家庭に於ける實地敎育

研けば石も玉となる、磨すれば木片も飾となる、玉となり飾となるべき木も、石も、研磨よろしきを得ざれば、光を發せずして、一生を人の下足の下に履みにちられて終るべし。まして玉よりも貴とく、飾よりも美わしき、人の子を、研磨の方よろしきを得ず、世の厄介者となし果つに事あらば、罪何れにか歸すべきぞ。もし小兒敎育は學校のみなりと思ふ人あらば大なる間違也學校のみに小兒を托するは、未だ敎育の道を知らざる者なり。小供を草木の種子に例ふれば、學校は種子の少しく長ぜる頃ろ、移し植ゆべき畑けにして、種子を初めて養育敎育する苗床は家庭なり。如何に畑の土肥へたりと雖も、床に蒔きたる苗の、莖曲り、虫付きたる時は。美果を結ぶべき、强壯なる木を得べからざれば、苗床なる家庭の如何に大切なるかを知るを得ん。

敎育の中にも、大切なるとは多からんも、小供に起業心を發起せしむる事は、最も大切なる事なり。如何に、古人が大發明を爲せし事を聞かしむるも、物理化學の蘊奧を極むるも、所謂生ける字書となるのみにて學問は何の爲めにもならず。反て高慢と、不快を購ふの仲立となるのみ。

小供に起業心を起さしむる最良の法方は、小供をして、未だ二葉の頃より、日常見る處の物に隨たがひ、實地に理學、化學の說明を、最も簡易に行ひ、實見せしむるにあり。さなきだに、小供は物の原因を、探究せんとを欲するものなるが故に、手を携へて外に出でんに、彼は聞くもの、見るもの、殘さず問題の材料となし、

時にうるさしと叱からるゝ迄は、止めざる事あり、幸にその父母、教育の精神あるものにして、そのうるさき事を、丁寧に教しへて飽かざれば、その小供は、已に起業者の卵子となるものなり、もし不幸にして、父母めんどうの一念に支配せられて、太陽を、日の丸と教へ、雷を、指て鬼が味噌をするなりと教へ、あまつさへ之等を籍りて、小供を嚇どすの道具とするものに遇はゞ、彼が純粹の腦は、已に亂だされ、起業者の卵子は蹈みつぶされしものなり。

更らに一歩を進めて、小供の問ふを待たずして、已れ發問者となりて、その智慧を開くを得ば、その幸言ふべからざるものあらん。例へば茶の間、もしくは臺所にて湯を沸かすに際し、鐵瓶の蓋は、ワットに發明力を與へしと、同一の仕方に飛び上り、飛び下りつゝ、我等を招けり、此處に小供を携へて行き、先づ鐵瓶の蓋は、何故にかた／＼するやと問へば、誰れにても、湯が沸騰せしなりと答へん、さらば一層深かく、湯が沸へ上れば、何ぜに蓋が動くやと問へば、蒸發氣の事も説明するを得ん、もし蓋の上に重みを置きて、その蒸氣力の度を試驗し、或は口に栓して蒸氣力の、どれ丈けつよきかを試驗して、考ふる力を發育する時は、二十歳にして、始じめて、蒸氣車の理を知り、それよりそろ／＼と他の發明に取りかゝり、一生を二生になすも、時日足らざるに至るものと、幾許の差ぞや。

已が不用の時を見出だして、小供に教へんと欲するものあらば、不幸なる結果を見ん。何となれば、小供は、或る時は、遊び度してたまらぬ時あり、或るひは眠くして聞けども聞とへざる時あり、かゝる時に、たとへ教ゆるものが、時間を得たりとも、半分の功をも有たず、特に小供の好奇心は、一物に當りし時々に起るものにして、この好奇心を利用して、之を教ゆれば、順風に帆を張るの勢にて進むを得ん、されば夏の夜、冷

ずみ臺にありて、流星を見んか、その時は納涼の慰をさきて、地球引力の理を説明するの時なり。田舎を散歩して、水車を見んか、その時は水の力を説明して、水車を改良するの下地を作るに適當の時期なり。雨戸より入る光線によりて寫眞の理を説明し、堀抜井戸の水の出つる理より、傳信傳話の出來得る以所より、釜の湯の先づ上の熱する事、など日々起る處の事々物々に付きて、平易に、簡短にしかも、實際の試驗を積みて腦を苦るしむる事、少なくとも、天地間の理を知ると、全時に知らず〳〵の中に、之が發明の力を養ふとは、如何に大切なる教育法ならずや。もし此法に隨ふて、何の發明も爲さず、少しの發明心も起らざるものは、白痴にあらざれば、狂人と豫定するも、過言にはあらざるべし。

下女を使ふにつきて心得べき廉々

今度の下女は朝よりいねむりを爲して、物の役にも立たずとて、追ひ出だし。此度の下女は矢鱈に間食を爲すとて、追ひ出だし。次の下女は禮義を知らずとて暇を出だし。次にはおしやべりを氣に入らずとし。又た來れるは身廻り汚たなしとして長く置かず。掃除の下手なるより、氣轉のきかざるもの、怠惰なるもの、愚かなるもの、一々己が氣に入らずして出し行く時は、東京は愚ろか日本中の慶庵に命じて、毎日手わけにて下女を求めしむるも、恐らくはその人の一世に兩手を屈する程も、滿足なる下女は集らざるべし。人の心は十人十色にて面相の異なるが如くに心も異なると云へば、始めより己が心に全くかなひたるものは得難かるべし。只だ忍耐して、教育する内には、曲りたる

竹も直ほとなり、悪しき枝だぶりも好くはなるべし。」
下女教育の事は已に人々も口にする所にして、已に子守の學校を設立して、下女をも共に教育せんと試みし



者もあれども、困難は常にその成功を打ち伏せたり。如何となれば、下女となりて人の家に傭わるゝ位のものは、多くは家貧しくして僅かの教育すらも受け得ざるが常にして、一生の冀望、目的とする處は、縮緬の小袖一枚に繻絆の丸帶一すじを得んとするに過ぎず。その望みにても、有るは無きに勝ると云ふ位ひにして、中には何か故に、奉公に出でしか、何が故に今日働くか、更らに考へだもなさゞる者少なからず。隨かつて之に種々なる事を教へんとするに、心是にあらざれば、聞けども、聞こへず、聞こへども心に止まらざるもの、下女教育學校の第一の困難なり。第二は下女を仕ふは世話しき故にして、即ち下女は時間少なき世話しき中に働くべく豫定せられたる人間なり。之が故にたとへ一日一時間、もしくは一週二三時間の僅かなる時と雖も、中々容易には抜け得べくもあらず。幸にして主人の慈善心厚くして、進んで之を教育せんと欲するものあらば、またしものとなれども、かゝる主人は多數の中の少數なるが故に、自ら望みても尙ほ得べからず。之れ第二の困難なり。次ぎは假りに主人も之を欲し、下女も之を好むと雖も、家の中には少なからざる不意の

用事の起るあり、例とへば不時の來客ありて、さしつかゆる事あり。或は引き續きたる雨天の後に晴るゝとありて。洗濯物のつかゆるとあり。或は急の使ひに出づる事あり、繁雜なる家務の中にありて、一定の時間を得んとは、中々に安き業にあらず。かくて一度休み、二度休む中には行くもたいぎとなり、行きたりとも共に學ぶを得ざるが故に失望して止むるとあり。之れ第三の困難なり。故にとても學校としては、下女を敎育し得ずと斷言するも過言にあらざるべし。然れば如何にせば可ならんやと云ふに、一家の內の最も都合よき時間を以て、その家の風に、最も好く適する方法により、その下女〲のよりて、最も欠けたる處を見定めて、最もそのためによき處を撰らびて、分に隨がひ、類によりて之を敎ふるこそ、最も簡易にして、善良なる法方ならん。

右に付きての注意

持ちものは主人に似るとて、家にありて上み立ちたるものゝ風は、下々末々迄も之に習ふものなれば、家を主どる人は、一日五たびも六度も、事に付き物に付きて、已れを顧み、人の手本となりて欠點なき樣、身を謹しむべし。上のもの遊戲を好めば、下のものも之を好み。上のものむだ話しを好めば、下のものも之を好み。上にしまりなきとはたゞちに下に傳染し、流行を追ふと、家內の猥褻なると、禮義なきと、一々下のものゝ手本とならざるはなし。人を使ふは苦を使ふとは之れ等を指すことにして、良妻賢婦と稱せらるゝものは、必ず下を善化するの淑德を有せざるべからざれば、注意の上にも注意すべき處なり。

下女何物ぞ

人を怒からせ、人を已れにそむかしむるの明法は『汝何物ぞ』と言わん計りの權幕を以て、已れと同等以上のものにあらざる上は、人を人としてあつかわず、下

女下男の如きは、時に金錢を以て雇ひたる道具器械の如くあつかふより。勝れたるはなし。之れに引きかへ人の心を全く引き込みて、己かために親切なる助手となし、信實なる同感者とし、己れの心のまゝに彼等を動かさんと欲せば、慈愛を以て人と交わり、人の悲しみに同情を表し、殊とにその過ちある時は、他人の面前にて愧づかしむるが如きことを爲さず、親切に之を云ひ聞かしむる時は、鐵石ならぬ人心、いかでかその厚情に感ぜざるとかあるべき。何事を云ひ聞かしむるにも、先づその心を得ずしては、折角の諫言も、無益となれば、最初に勤むべきは人の心を得るにあり。

若し悪しき風あるか

若し悪しき風あるか、之を敎しふるには餘り度々なるべからず。餘り度々なる時は、所謂耳がたこずれして、又た出でたりと思ひて、心服せざるに至るべし。されば悪しき事五つ六つも溜まりたる頃、鳥渡何かの事によりて、恩惠を感じたる時、又た自分の心に立腹等によりて波立たざる時、靜かに話し聞かしむべし。それにてきゝめのなきが如きものならば、それこそ敎育のしかひなきものと知るべし。（未完）

子護女

やぎ生

筋骨逞しく、力量ありて、終日子供を負ひ歩むも、疲るゝとなく、その上使ひ歩行などする山出しの女子を雇ひて、珍らしきよき子護を得たりと、喜ぶは大なる間違なり。なる程、力量あれば疲れもせず、又使まで便ずるとは、至極重寶なるが如しといへども　子供を負ひ歩む計りが、子護の能にあらず。又無敎育にして、物事に無頓着なるは、托する小兒に害こそあれ、益とては皆無なるべし。いまだ此邊に注意なき讀者の爲めに、事實を示さむ。

立張に子供を脊負ひて家を出で、此所なれば見付かるゝことなしと思ふ所まで行き、近隣の子護仲間と共に、明屋或は神社の如き場所に入り、酷なる者は土の上へ、雇はれたる家の八ヶ間敷きものは石の上又は床の如き土の付かざる所に下ろし、負ひたる紐にて子供の腰のあたりを縛し、紐の餘りを木の根方或は杭柱へ繫ぎ、歩めざる樣にして、それよりは子護連中、車座になりて遊び戯るゝなり。又子護が食欲を充たさんとするときは、小兒に向ひて、これから御屋敷へ行きますから、御母さんに、御菓子を下ださゐと御願ゐなさゐ、一つではいけません、五つですよ、私がいひ付けたと云てはなりませんと、打たぬ計りに敎へて背負ひ、家に戻りてかく言はするなり。父母はさりとは氣も付かず、いふが儘に與ふれば、子護は家の門を出づるか出でざるに、小兒の手より菓子の過半を奪ふ。其他子護の敎ゆる爲めに、父母を欺くこと、擧て數ふべからず。

子護なりとて漫に卑下すべからず、子護女は幼稚園の敎師と同樣、父母に代りて子供を保育せしむべき大任を有するものなれば、少なくも尋常小學校を卒業し世間普通の事に通し居るものを撰び、上に述べたる如きことを爲さしめざる樣、よく〳〵いひ聞かし、子護の大切なることを、覺しむるが肝要なり。又如何に勝れたる子供にもせよ、父母之れに一任して顧みざるときは、悔ても及ばざることを生ずるに至るべし、

夏の食物

さなきだに之れよりは、夏いたみとて消化不良より來る衰弱の病にかゝる人多き時候にして、消化不良の病にかゝらざるも、何となく食事進まざるが如きはめづらしからざれば、食物の注意は一しほ妻君の腦をいたむべき問題とならん。殊に腐敗し易きもの、熱きものは、料理帳より去らざるべからず、めづらしきものと、

さつばりしたるものと、手早き料理の時となるべければ、是よりは料理も中々に忽にすべからざる問題なり。

開花鯛

赤鯛、あま鯛等は、最も可なり。之なくば鮃鰭にてもよし、油の甚だしからざる魚の鱗と、腹わたと、頭とを去りて、三枚におろし、皮を去り、更らに少さき骨のなき様に、改らため、俎の上にて庖刀の背にて毆たき、之を擂り鉢に入れ、その中へ薯蕷、雞卵の白身、鰹魚の出し等を入れて、能く擂り、塩と味淋にて程よく鹽梅し、とろ〳〵としたる處を茶わんの蓋、もしくは小皿に入れ、之を熱湯を入れたる鍋の中に入るゝ時は、周圍は少しく開きて、白花の半開の觀あり。その中心へ雞卵の黄味を表ぬきて、ばら〳〵にして入るれば、更らに美つくしくなるべし。

鰹の傳法やき

時候ものと呼ばるゝ鰹魚の皮を取り、五分つくりとて、さしみの少し厚つみにつくり、先きに葱の白味計りを好く洗らひて、細く緯にさき、八分位の長さに切りて、土鍋に一通りしき、その上に先きの五分づくりを並らべ、その上より鹽をふりかけて焼くべし。

うつろ豆腐

深かみある鉢に水を入れ、之れに生豆腐一丁を四つ切にして浮かべ、金網か灰ふるいの如きものに火を乘せて、水中の豆腐をしやくしの類にて、一面づゝを水上に浮かべ、顯らわれたる處をその火にて焼くべし、さて焼けたる豆腐を、菓子昆布にて包つみ、細き甘瓢にて括くり、さつと湯出で、之を鰹節のだしに、味淋醬油を加わへて煮るなり。

奈良茶めし

夏分は菜のものゝ良きも、大切なれども、飯の加減も亦た大に食慾を勸むるに關係あり。奈良茶飯は、所謂

茶入料理なれども、夏分にてさつぱりとして、好きものなり。これは煎茶の極々良きものを煎し出し、通常飲む茶より、少し濃くして、その茶より水加減を爲して、飯を焚き、その煮へ立ちたる所へ醤油と、味淋とを、各々小茶わん一ぱいづゝ入れて、蒸し、出來上りたれば器にうつし食膳に供すべし。

鯛飯

鯛の鱗を去り、腹部を掃除し、皮を剝ぎて、三枚におろして、骨を抜き、五分位の厚つみにさいのめに切り飯の沸騰して火を引かんとする前に、釜の中に入れ、暫時蒸すべし。之れには西洋からし、胡椒、おろし等好みに隨ひて役味を作り、鰹節のだしにてすまし汁を作り之に注ぐべし。

鰯飯

今や鰯の春なり。鰯は價廉なるが故に、下等食物の如き心地こそすれ、實際の美味は鯛平目に勝るとあるも劣りはせまじ、之を飯の中に入るれば、又た一種の美味となる。鰯飯を作るには、鰯の頭と腹わたとを去りて、能く洗ひ、横の大骨の抜き得べきものは、成るべく丁寧に抜き、飯の煮へ上りて、火を引かんとする前に、飯の中へ逆さにさし込み、後火を引くべし。さて飯の能く蒸れたる時に、先にさし込みたる鰯の尾を以て引き抜けば、骨は身のみ殘して、悉とく抜き得べし。其飯を上より下迄よくかき廻して器にうつし、鯛飯と同しく役味すまし、汁をかけて用ゆる時は、生ま臭味なくなりて、實に美味なり。但し温かき中に食ふを可なりとす。

婦女職業案内

内職につき注意

本雜誌の愛讀者及其他より、東京諸新聞に廣告せる内職募集につき、其危險なるや將た安全なるものなるや

を問合せらるゝ向尠なからず、我社は玆に二三の注意を記して愛讀者に報ぜんと欲す。

目下東京に於て內職の數々少なからず、曰く麥藁帽子編、足袋縫、「マッチ」箱貼、ボール製造、衣服仕立、ハンケチ縫、縫箔、毛糸編、團扇骨編、麻裏草履、石版彩色等一々記するに遑あらざれども、是等內職は婦人にても小兒にても誰にても出來得らるゝ業なり。若し熟練の長日月を要する專門的職業なれば、決して誰の家にても爲し能はざるのみならず、到底內職の實を擧ぐること能はざるなり、然るに世の諸新聞の廣告欄內を見るに海外輸出などゝ稱し一日一圓より二三圓にもなる內職あり、其代に金二圓郵送せよ、直ちに書面にて傳授なとゞ廣告して、世人を欺瞞し、所謂詐欺取財の行爲を爲すもの比々として之あり、其の詐僞と知らずして此手合にかゝるものは誠に氣の毒なり、何程海外輸出と申しても高が婦人や小兒がする內職に一日一圓乃至二三圓の收入ある筈なし、當今の如き世知辛き世に堂々たる男子と雖ども月に二十圓乃至三十圓の働きするは容易の業にあらざるを、婦人や小兒の細腕にて何條さる事の出來得べき、人を馬鹿にするにも程のあるものなり、又「內職何々」と稱し瓦を玉に變し土を黃金に化するといふが如き途方途徹もなき奇法を世に廣告し一法傳授料一圓の處當分の內五十錢などゝあり、其眞相は前述海外輸出美術何々の業と異ならず、嘗て色を白くする法とか、鼻を高くする法とかを世上に鴻大なる廣告する先生に就き、或人が戲れて曰く、先生は世人に色を白くする妙法又は鼻を高くする奇術を授けながら、先生自身は色左まで白からず、鼻甚だ高からざるは如何、又先生の奇術を二たび傳授を乞ふものありやと、先生微笑を含み得々然として言つらく、君（問者）も亦愚なるかな、醫者の不養生、紺屋の白袴、易者身の上を知らずといふ事あり、又自分の奇術を一

度傳授を乞はずとも日本國民一度宛にても四千萬人ならずやと彼等の胸中大率斯の如し。

内職の要は微細の賃銀にても永く繼續して勤勉するにあり、決して一時に大金を得るの手段にあらず、家庭に於て閑暇なきやうにし、金錢の尊きを知るにあれば一日五七錢の賃銀を得れば夫にて澤山なり、一日一圓など、は皆に出來得ざる内職のみならず、斯樣な法外の利益あるとしても、却つて金錢の無造作なるを知り家庭に不儉約不健全の風を生ずるに至るべし。

手藝案内

梅雨の準備

今や梅雨の節に入りたれども炎天蒸すが如く燒くが如く一滴の降雨なけれどもこれより以後が梅雨の節を過したる頃に淋雨連日鬱悶堪え難き事之あるべし、此時に當り外に出づるものは如何なる衣裝を爲して雨露を防ぐべきか、先づ男子なれば外套を被りて外出するが宜し、冬の外套にて間に合はすも宜しけれども、薄羅紗最も然るべし、又日本的なれば被布又は合羽を着用すべし、被布の裁縫法は已號に掲載し置きたれば、茲には記さず、合羽の裁縫のみを記すべし、合羽には道行合羽、裝束附合羽、女合羽あり、道行合羽は一丈四尺五寸を身ごろとし（之より短かくするは目下の流行と知るべし、丈の長短は其人々の嗜好に任す）袖三尺宛則ち六尺を取り、襟肩は前身を二寸長くして四折にし、くり取るべき頸の寸法は縱四寸五分横二寸五分次に襟四尺五寸を取り殘り三尺を縱に四寸落して頸襟と爲し、片縁を脇入及袖口に積るべし、縫方は被布の八ツ口を除きたると同じものなれども襟は二尺五寸と知るべし。裝束附合羽は一丈五尺を前後の身ごろと爲し、袖は前同樣六尺を取るべし、襟肩も道行合羽と同じく、襟を四尺五寸と定め、其殘餘の方二尺二寸を縱

に半切して袖に及び脇入と爲す、縫方は袷布と同じけれども襟は別に裝束襟を附す、女合羽は身ごろ一丈六尺を取り袖は例の如く六尺を取り殘り六尺を横に半巾とし其中に二尺五寸の増帛を半襟の下へ接ぎ箆附を爲すべし、縫方は第一に袖、第二に脊筋第三脇筋を縫ひ袖をくけ、襟巾上にて三寸强下にて四寸に斜に折て附けて縫ひ又之を襟の裏よりくけ附くべし、但し男合羽に用ゆる布帛は「セル」地第一等なり、女合羽は袷布と同しく繭紬の如きさびたる織物に天鵞絨襟を附するが宜し。

養蠶術（承前）

今少しく蠶兒取扱の事情を續記せん。

蠶下立――除沙又は裏拔ともいふ、これは蠶下の糞尿、殘桑等を掃除する事にて各齡中（眠らんとする時と、起きる時）に二回執行するものなり、五齡に至れば蠶躰肥大となり、多量の桑葉を食み、多量の糞尿を洩泄するものなれば、之を執行する事愈々多ければ愈々蠶兒に利あり、然れども一日二回宛行へば充分と知るべし。

移轉法――蠶兒成長するに從ひ他の蠶坐に分移せしむべし、其法は掃立初に一枚（三分三厘）の毛蠶を二日目に二枚、三日目に四枚、四日目に六枚となすものあり、或は三日目に二枚四日枚に三枚五日目に六枚となすものありて其法區々なれども、通常用ゆる所に從へば二日目に二枚、三日目に三枚、四日目に四枚、五日目の眠下立の際に六枚と爲す、則ち一齡中に六枚と爲せば可なり、これより以上は倍數を以て執行す、則ち二齡中には十二枚、三齡中には二十四枚とするが如し。

桑の事――蠶兒に與ふ桑は新鮮ならざるべからず、塵芥の着かざる蜘蛛の巣に附點せざるものを與ふべし、鳥類又は其他蟲類等の糞尿の附着せるものを與ふべか

らず、又桑葉に漆樹の露滴に濕ひしものを與ふべからず、桐又は榧の葉の下に生長せし桑は宜しからず、特に注意すべきは蚯蚓の産卵附着せるものを與ふべからず、扨蠶兒に桑を與ふるに當初の間は日々新しき桑葉を與ふるが宜しけれども、稍成長せる蠶兒に至りては日々摘み取ては間に合はず、勢ひ貯蓄せざるべからず、其貯蓄の法は、朝摘の桑と正午摘の桑と午後摘の桑とは濕氣の多少により、乾燥凋落する時間に差違ありと雖も、孰れも決して乾燥せしめぬよう注意すべし、若し桑の蒸熱するを防がんとならば、時々端より端まで掻き立て空氣の新冷なるを通はすべし、貯蓄の場所は臭氣なき所を撰ぶべし、併し桑に餘り濕氣あるも悪し、入梅中に至り霖雨連日桑樹の乾燥する遑なきには、枝根より刈取り軒端若しくは空氣の流通宜しき室内に吊し置きて濕氣を去るべし。

桑の刻方及給桑――刻方は桑葉を積み重ね蠶躰と同き長さなる長方形に刻むを宜しとす、而して一二齢の蠶兒に與ふべき葉片は篩ひ落し、葉柄を箕にて簸るべし三齢以上には葉柄及新莖をふるひ落し、其葉柄及新莖の刻まれたるものと共に落ちたる小桑片は簸出して蠶兒に與ふべし、又桑を給する事は甚だ熟練を要す、今其熟練者の行爲を記せば、先づ蠶棚の左端に立ち左を向き蠶棚を右に見て左に桑笊を置き、上棚より次第に下棚に移り、後しざりして次行に移り、其掛方は兩手に桑を掴み蠶座の前を隅より兩手を並行せしめて回すこと三回位にして了るを宜しとす、而して其給桑の分量は大抵第一齢には第一日四回四匁より五匁、第二日八回量同上、第三日八回五匁より八匁、第四日八回八匁より十二匁、第五日八回十六匁より二十四匁、第六日八回三十匁より二十匁、第七日四回十八匁より十二匁、第八日絶食、第二齢には第一日三回十四匁より十八匁、第二日七回二十一匁より二十四匁、第三日七回

二十四匁より三十六匁、第四日七回四十八匁より七十匁、第五日七回七十匁より四十匁、第六日二回四十匁より三十匁、第七日絶食、第三齢には第一日四回四十匁より六十匁、第二日六回六十匁より七十五匁、第三日六回七十五匁より百十匁、第四日六回百二十匁より百五十匁、第五日六回百六十匁より百四十匁、第六日四回百二十匁より六十匁、第七日絶食。第四齢には第一日四回百二十匁より二百匁、第二日六回百二十匁より二百六十匁、第三日六回二百六十匁より三百匁、第四日六回三百八十匁より四百八十匁、第五日六回五百匁より三百八十匁、第六日四回三百匁より百六十匁第七日絶食。第五齢には第一日二回四百匁より四百五十匁、第二日五回四日五十匁より七百匁、第三日五回八百匁より一貫匁、第四日五回一貫二百匁より一貫四百匁、第五日五回一貫四百匁より一貫六百匁、第六日五回一貫六百匁より一貫八百匁、第七日五回一貫八百匁より一貫六百匁、第八日五回一貫六百匁より八百匁、第九日四回六百匁より二百匁とす、これは蠶網一枚に對する分量を示したるものと知るべし。

桑給の種類――責桑、留桑、振桑、附桑等なり、之を畧解すれば責桑は蠶兒の食盛り過ぎて少しく自躰を縮少し、正に休眠に就んとする時より、留桑迄の若干回の給桑をいふ。留桑とは畧ぼ起蠶揃へる時に桑留を爲す最後の給桑なり。振桑とは桑休めを了りて已に半は起きたる各蠶兒が全蠶兒の起き揃ふまで食はざれば、飢蠶とするを患ひて給するものをいふ。附桑とは成べく嫩く且つ柔軟なる桑葉を責桑と同じく細長に刻みて、已に起き揃ふたる蠶兒に始めて少しく桑を給する事をいふ。

蠶兒に禁物――蠶兒の害毒となるものは、鹽氣、煙草の煙、石炭の臭氣、澁、鐵、煤、茶、硫黃、下糞、蕃椒、山椒等の臭氣及香氣の高きものを忌惡するが故に蠶

家は勉めて之を忌避すべし。

蠶病及其豫防法——蠶兒にも數種あり、其重なるものを擧ぐれば黒痣病（全躰に少しく白膿を帯び黒痣を生ずる病）不眠蠶（少しく肥大となり白光を帯び休眠せず遂に死するに至る其原因は乾濕の過度又は空氣の腐敗による）白殭蠶（濕桑又は蠶糞堆積の原因より一種の黴を發し、之より害毒を起すもの）節高（五齢の四五日目より節高く淡白色になる病）膿蠶（節高病より膿を出すもの）下痢病（濡桑を給せし原因より屡々軟糞を瀉して死に至る病）空頭病（頭部透明となりて死に至る病、原因同前）流蠶（熟蠶となりて簇に上り將に結繭せんとする身體暗黒色となりて斃るゝ病）起縮病（休眠の際給桑の不足より生ずる蠶躰皺を生し淡紅色となりて死に至る病）轉蠶（五齢に至り格別なる異状を見ずして死するもの、糞熱等に原因す）細蠶（蠶種の不良より蠶兒生育せずして死するもの）過熟蠶（已に若熟せるものを簇に上せざる時は繭を造るの場所なきに苦み漸次淡紅色を帯びて縮少する病）轉蠶（已に全蠶座十分の九位熟蠶せるの際未だ熟せずして殘れる蠶兒が濕氣冷熱等の障害の爲め熟蠶の期を失ふ病）實に以上の如し、蠶病も其他に傳染するの恐あれば他の健蠶の爲め豫防法を執行すべし、其法は亞硫酸を蒸するも宜し、則ち二間四方の蠶室毎に凡そ二百匁の硫酸に粉炭を雜へ火鉢に投して火を投す、此外種々なる方法あれども畧す。

熟蠶と簇——熟蠶とは蠶が自ら食を絶ち、蠶兒たる第一世期を過ぎんとするの時なり、此時に及べば身體稍々縮少すると共に咽喉部より半透明躰となり、躰中は糸質の外一物を止めざるを見る、これ熟蠶の時なり、熟蠶に至るは蠶座中の事情により各蠶兒によりて多少の遲速あれども、已に熟蠶となりたるものは、直ちに各蠶座を卸し、之を拾ひ取りて熟蠶器に移し繭を造ら

しむべし、若し之を怠る時は過熟鑑となる恐あり能々注意すべし、而して篏は始めより準備し置かざるべからず、四齢五齢の時は多忙を極むるものなれば甚だ晩計なり、遲くとも蠶兒二三齢の頃、即ち餘り多忙ならざる時に於て閑暇を見計りて其準備を爲すを肝要と知るべし、

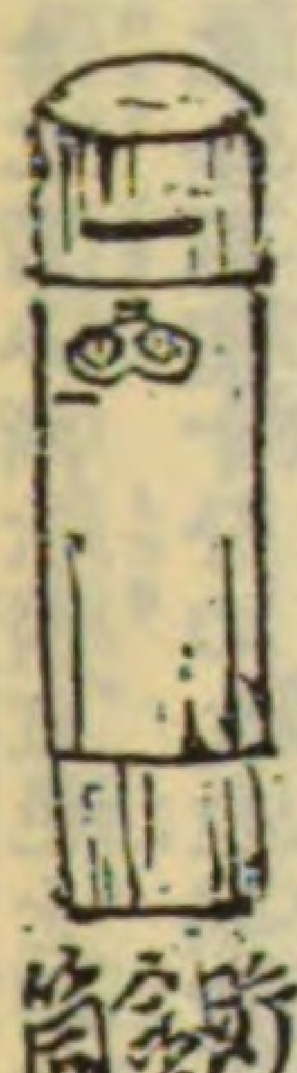
社交一斑

流行の栞

面白き貯金函　春夢

貯金の必要は茲に改めて申す迄もなし、併し貯金といふ事は甚だ實行し難きものにして、十圓の金は儲けるとも一錢の貯金を爲すこと能はざるもの多し、貯金は人生に一大保險と一大幸福とを與ふるものなれば必らず貯金の志を興し、貯金の實を實行せざるべからず、殊に小兒に於ては徒食、冗費等に費す金錢は一厘一錢たりとも貯蓄し置き、則ち無用のものを省きて有用の事に資せざるべからず、又餘裕あるものを準備し置きて不時の入用に充てざるべからざるなり、されば貯金する法には種々の法あり、遞信省にては一圓十錢以上を預くるを得、其他の貯金銀行の如きに至りては一錢以上を預る所あり僅少なる利子を附すれども、日々郵便局や銀行に行きて貯金するは、甚だ手數と面倒とを要し是等を奥行に思ひて貯金の志あるも實行實踐するに至らざる者あり、貯金玉と稱する陶器製（小五厘大一錢）に日々一厘一錢宛にても貯蓄して宜しきも、蓄積し得たる金錢を得んとせば、貯金玉を破壞せざるべからず、又陶器は破壞し易きものなれば、自分が入用の時は大切なる貯金函を一撃の下に破碎し永く貯金の實行を見る能はざるのみならず、破壞して貯蓄したる金錢を出す時には、美麗なりし金錢も、土砂に塗れて甚だ面目を汚し、小兒等には不感情を起さしむる事あり、陶器製の貯金玉は多く小兒等に喜れず、竹筒も然り、入用の時には何時にても振出され又は破壞するに依て折角貯蓄しかゝりしものを中途にして貯金の途を杜絶することあり、一體貯金などを爲すには日々續けざれば永續し得ざる恐あるものなれば、貯金は少額にても日々引續き途絶せぬやう工夫專一たるべし。

昨年頃より專賣特許を經て賣出せる貯金函あり、一寸面白き工夫なるゆゑ、貯金の心懸ある家にては大抵此器を用ゐ、其形は圖によりて



示さるゝ如き長條筒形を爲し、上端に一錢銅貨と五厘銅貨を挿入すべき横穴あり、之より一個宛一錢銅貨を五十枚（五十錢）を投入せば下端の底は銅貨の重量によりて自然に開くを得れど

も、五十錢に充されば如何なる方法を用ゆるとも、器具を破壞するにあらざれば中なる金錢を拔くこと能はず、これ實に面白き工夫なり、小兒をして隨意の時に銅貨を投入せしめ五十錢ともなれば親たるものは、之を遞信省か貯金銀行に預け遣るべし、器は銅製にして金色の修飾を施しあれば體裁誠に美しく、小兒の玩具とするに足りぬべし、價は五錢、幾回にても使用すべし、然れども貯金は小兒等には其の意の向く時に少し宛貯金せしめて、益々貯蓄の志を起さしめ、決して強て行はしむるは一考を要すべきとなり、強て貯金せしむるに於ては、有用にして他に用ゆべきものをも、暫時無用なる貯金箱に收め置かざるべからざる弊を生し、物を死用すると吝嗇の氣風を生ぜしむる事あるべし、近來小學校にて其生徒等に課税するが如く日々貯金を徵收するは甚だ其方法宜しきを得ざるものなり、又近所五六家合併し日々講銀を取立つるが如く命令的の貯蓄法は弊害多し、故にかゝる貯金器一個（家内の人々又は小兒一人に一個づゝ）を備へ置き隨時隨意に貯金を爲さしむべし但し此器は一錢銅貨に限ると知べし。

帷子

本年は炎暑例年より十日餘も早く目下入梅中なれども暑氣土用と異ならず、九十度以上の熱度に達したる事あり、されば早や帷子に紗の羽織を被る人澤山見受けらるれば、玆に流行の傾向ある帷子の案内を記すべし、但し本號は甚だ編輯締切時間に切迫したれば、次號には盛なる流行の帷子及其流行柄合を縞樣によりて報道するを怠らざるべし、

今目下の形勢を示せば左の如し。

紳士向には先づ本琉球上布柄は紺地白地蚊飛白、六名縞等にて代價は紺地極上十七八圓より二十五圓位白地最上十圓位なれども近來品甚だ稀なれば越後上布にして其色澤地質共更に本上布に劣らざる位ひのものを製出するに至り大に人氣に適へり柄は蚊、スワマ、大明縞等を宜しとす代價は十五六圓位なり又婦人向に至つては前記の本上布も可なれど遊向にて誰れにも適するは明石縮なり縞、飛白共追々巧妙の品現出せり又た好綾縮緬なるものあり地質は縮緬の如くにして練糸を用ひたるものなるが光澤ありて皺とならず去りとて粘付く等の事もなく優にさらりとし其柄合及び色合等も頗る高尚にして意氣代價は六七圓より七八圓位是れに匹敵するは練上布なり次は壁好綾幷に普通の好綾なりとす代價は柄行次第なれども紺地小飛白物四五圓壁「スキヤ」には壹圓方高價と知べし何れも例年より賣口よく吳服商は大喜び少女物には絽の友禪代價は珍柄十圓位より七八圓のものが前記柄類の大柄物を用ゆ代價は大同小異なり男物灘羽織には紗の上等黑の定紋付是れは禮服の中に流行す通常着の上等には本年特に製出せし越後産の練上布極めて上等の物にて柄は大明、萬筋、刷毛目等にして代價は五圓位なり此の品昨今上流に高評あり並の數寄屋撚上布、壁好綾、の類相變らず流行せり代價は數寄屋二圓以上、撚上布、壁好綾にて三四圓位又婦人向の帷衣に品位よく高尚、意氣兩用の品物白數寄屋（代價一反物四五圓）又は白壁

スキヤ（價五六圓）の地に當時流行せる淡利久淡鼠の小紋を好みに任せて兩面に置かせ地色を極めて淡白に染上げば實に優美のものなり之に定紋をつくれば禮服ともなるを知るべし

流行の夏座蒲團

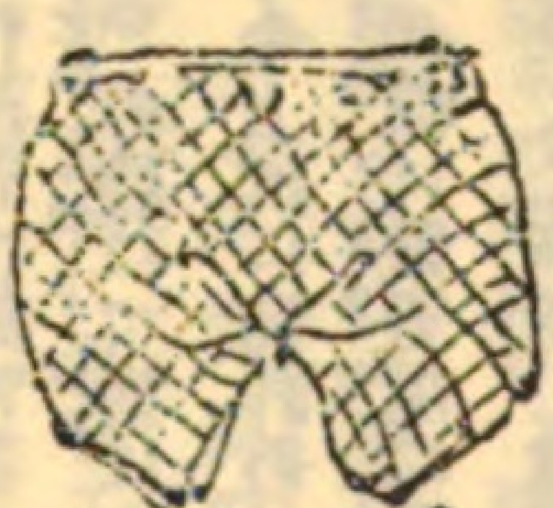
安物には岐阜油團相變らず流行す、少しく上等品の流行には「アンペラ」と「ゴム」とを合せたるもの、若しくは文織に「ゴム」を合せたるもの、若しくは紅ゴム製需用多き由、若し平民的に至りては鉋屑を萠黄の糸もて綴ぢ合したるとも〳〵輕やかなる敷物（一枚二錢五厘位）を用ゆる家もあり、又此敷物を冬座蒲團の上に載せて一寸綿入を氣取も面白し、素より一年限のものなれども、鉋屑の白き光澤甚だ美麗なり、鉋屑は啻に座蒲團に止まらず、括枕又は船底枕の上包其他に使用せらる。

座蒲團の直段を擧くれば左の如し、

岐阜油團五拾錢方一圓三拾錢、ヘラ製交織角一圓二十錢、竹センゴム腹合角正パンヤ入二圓二十錢、アンペラゴム腹正パンヤ入角二圓三十錢、ヘラ製交織ゴム腹合綿入角二圓六十錢、ヘラ製織綿入ヘリ付キ一圓九十錢、サビゴム並判角正パンヤ入二圓方二圓三十錢、多有地西京友仙染角夏綿入三圓五十錢、正綿入一圓五十五錢方一圓八十五錢、改良紅ゴム製三圓方三圓二十錢、改良ラシヤ製一圓六十錢方二圓廿錢、本革布團八圓十錢より十一圓五十錢

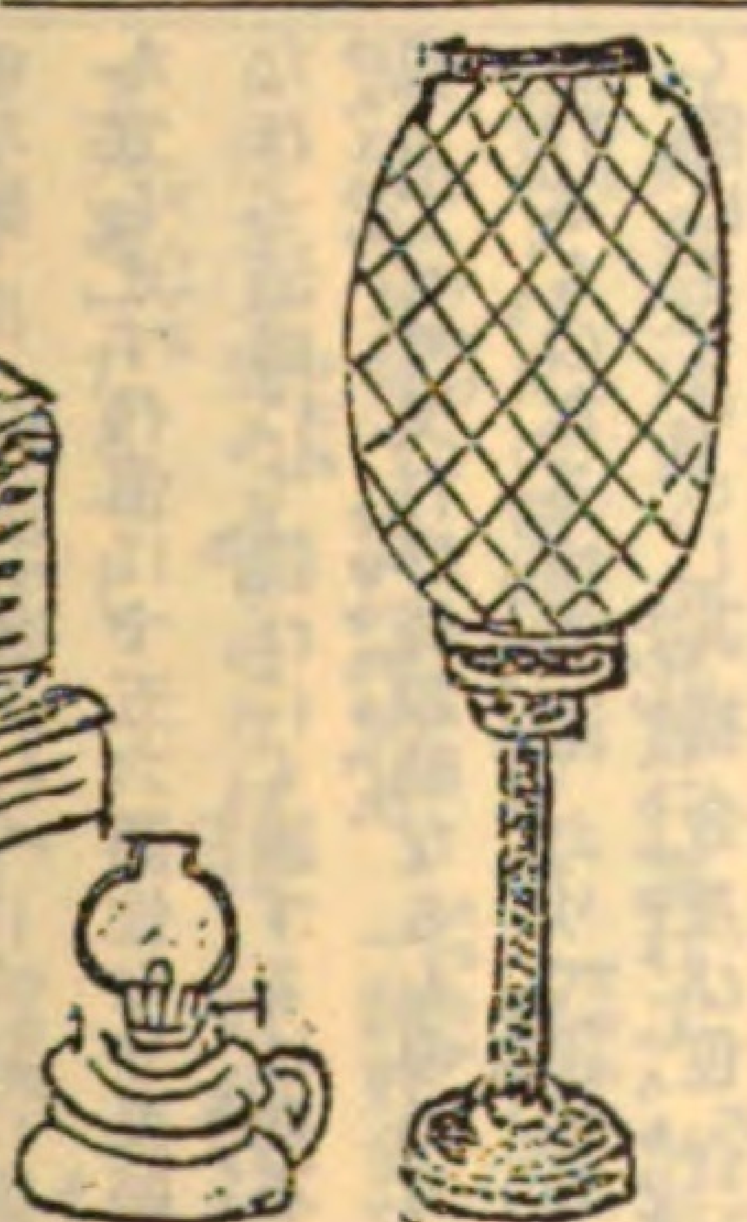
新形の猿股

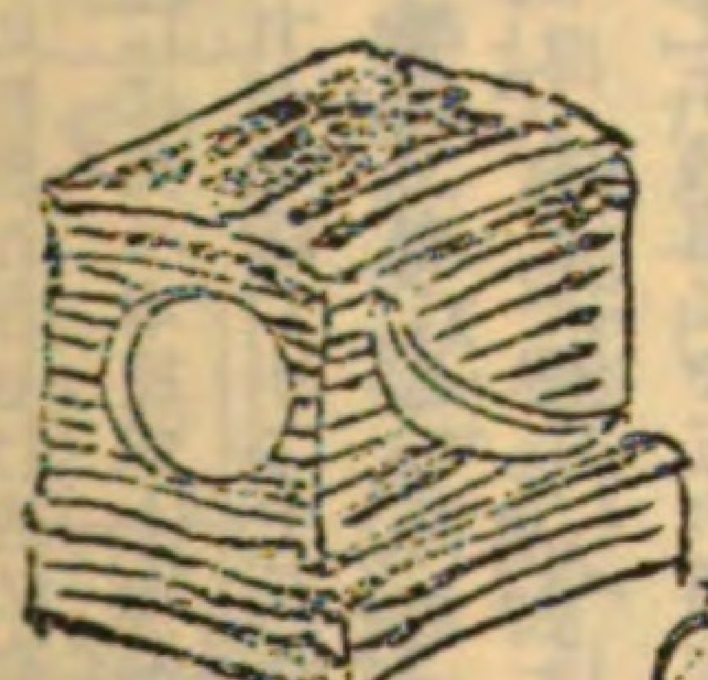
本年新形の猿股は別に變りし事もなけれども、圖によりて示さるゝ如く、兩股の半側面が斜になる所なり、此新形の起りしは少しにても切地の入らざるを旨としたるなるべし、從來猿股には「メリヤス」製多かりしも洗濯に不便なる處より本年よりは殊に木綿、金巾等の屢々洗濯の利くものを用ゆるやうになりたり、猿股は最も汚れ早く且夏季には甚だ目立しきものなれば、必らず屢々洗濯するを要す。


猿股

有明の燈

「有明の光なつかし夜の友」有明の燈の流行は如何、枕頭の燈火は如何、通常の「ランプ」にては甚だ俗らしく且つ去二十日の大地震等の如き事變起る時は危險此上なし、種油の如きは物に少しく抵觸すれば忽ち油波顛覆して後の掃除に手の入る事あり、これも面白からず、然らば如何にすべきか、少しく石油よりも高價に上れども杀氣か石臘等を燃すべし、裸蝋燭は危險なり、如何なる行燈を用ゆべきか、圖に示す長圓形の行燈は多くの家庭に用


有明



ゐらるゝ夜の友なり、煤竹もて網形の碗に編み、元司入吉野紙の如き薄く透明なる紙を貼り、其中心に燭を點す、又角形なるものは眞に枕頭の燈に適ぎす、之を提げて家庭を往來するは面白からず、前者は手燭の代りに持行きても差支なし、燈光は滿月又は新月形の透しによりて發せられ、緣は朱塗又は黑漆塗又は梨地宜しく、近來琉球塗なる朱塗行はる、これは行燈に限らず、盆、膳、其他の器具に應用せらる、又圖に示す少さき「ランプ」は有明ランプと稱し、「ホヤ」は丸形にして臺の据りも宜しく危險尠く、燈光は豆の如く螢の如く、ちいさく、物を見ろに便ならざれども、有明燈の要は物を見る目的にあらず、唯僅に光の各残をのこし闇夜の緩急に應ずるにあれば、此「ランプ」にて澤山其用に適ふなり、價は僅三四錢を投ずれば何處の「ランプ」屋にても賣捌く

日用品物價

◎白米小賣相場(一圓に付)　一等白米八升三合●二等白米八升七合◎三等白米九升一合●四等白米九升六合●五等白米一斗〇〇

◎雜穀(一圓に付)　川越白さ一斗一升●本場平豆一斗六升●北海道豌豆一斗六升五合●鍋陰元一斗三升七合●吉原大豆一斗八升●宅園小豆一斗二升三合●中手小豆一斗四升五合●川越本場金時八升三合●銚子隱元八升●新庄内平豆一斗四升二合

◎肥し物(一圓に付)安内海中羽粕三貫八百目●本場中羽粕三貫九百目●樽前粕四貫三四百目●同新上四貫七百目●同中五貫ヶ百目●同並五貫三四百目●新緋粕上四貫四百目●同中四貫六百目●同並四貫七八百目●酒部粕品なて四貫目見當●本場乘引干鰯上二杯四合●同次三杯●同新貝二杯四五合

◎鹽(一圓に付)　赤穗三俵八分五厘●大鹽並に八家三俵九分五厘●本齋六俵一分●新齋六俵八分五厘

◎砂糖(一圓に付)　稀車三十六匁五分●同次二分●蕃安二十匁三分ヶ十七匁五分●呂宗二十一匁二分ヶ十九匁●初雪三十匁五分ヶ三十匁●天光二十九匁●八匁五分●黑十八匁八分●同次十七匁五分

◎走り果物　本年の果物は二十年以來の大當りにて府下各所の青物市場は品澤山にて珍らしき盛況なり目下市場に顯はれし走り果物の二三問屋に於ける相場を記すれば左の如し

●青梅　昨今入梅の期節にて生熟なし房州産及び東葛飾郡産何れも入荷あり相場は四斗樽一本大玉金一圓位中玉七十錢下もの五十錢位なり

●桃　房州名古屋走り一ト箱(蜜柑箱)五十錢より四十錢位

●杏子　房州平郡産極上物一ト函(蜜柑箱)金五十錢前後より四十五錢下もの三十五錢位

●枇杷　は上出來中の上當りにて玉大く實少く且つ甘し本場房州南無彌村産上等一ト樽金六十錢中四五十錢下三十錢位

●南瓜　頭外なれども婦入社會に用ゐらるゝ愛敬もの唐茄子の走り出でたり産地駿河靜岡に在にて相場は極大五錢中四五錢小なるもの二錢五厘なり

雜　録

遺珠顆々

フエチロン

○憂　鬱

憂鬱は謙遜にあらず卑怯なる高慢の失望煩悶に過ぎず我等は假令跌にせ

よ倒るゝにせよ唯再び起つて前進することを思はざる可からず

○識　と　才　　チエストルノイルド

識は人をして重からしむ才は唯人をして輝かしむ世間多くの人は重味を得るよりも寧ろ唯見ろのみなり

○虚　飾　　デッフアン夫人

虚飾は婦人を誤ること戀よりも多し

謙遜

ダシエ夫人は最と教育ありて其が著はせる書籍に付いて世に高名なる女性なりしが某獨逸の學者はダシエ夫人の著はせる書籍を讀んで心に深くダシエ夫人を欽慕し夫人を訪はんものと態々佛國の都府パリスへ出懸けて行きダシエ夫人に面會して書畫帖を取出し何か認め呉れよと嘱みけるが當下ダシエ夫人は件の書畫帖を披きて其中には高名なる歐洲の文學者達の名を署してあるを見て此樣に名高き人々の氏名の中に妾風情の氏名を書加へることは迚も出來ぬと申して客人の依嘱を謝絶しけるが右の獨逸人は勿々承知せずしてダシエ夫人が謝絶すれば謝絶する程層一層切に迫りけるにぞダシエ夫人も今は獨逸人の懇望辭み難ねヤオラ一枝の筆を把りて「沈默は婦人の裝飾なり」てふ希臘の著述家の格言と共に吾氏名を書加へけり、

噂　　みや子

世の中にあたら幸福にあだなす敵は多かるべけれど、最も恐るべきは噂即ち後言てふ敵なるべし。一朝隣家の妻君眼に涙浮べて來たるを見れば、己がひが目に早くも邪推し、井戸端話しのよき材料と、急がはしくも向ひの家に走り込み、

一寸奥さんお聞なさつて。まアほんとにひどいぢやありませんか。お隣の御新造さんは今朝涙一ぱいためていらしつたの。きつとあのひとは御てい主がつらく當たつたに違ひありませんよ。私しはこうなるだろふと思ひましたよ。此の間もね、途中でどつか

の女にこ〳〵して挨拶して居たのを見ましたが、其間にあの御新造さんは二階で泣いて居たに違ひありませんよ。ほんとにこちらの旦那にでも願つてどふかして戴かなけりやなりませんねヱ。お互に御近所にこんな事があつてはめいわくで御坐いますから。

など丶、話しの尾に尾を付け、はては近所の中違ひ、親子兄弟、夫妻の不和を來たすは、憎むべき幸福の敵ならずや。

かゝる人の他人の秘密を探り知るの早きには驚くの外なし。通常戸を開かざれば見へざる事も、鍵の孔より細かに探り、電話電信傳はらざるなく、不道德不健全なる物語一として知らざるはなし。

昔ギリシヤの哲學者ザンセス其僕に市に行き最もよきものを購ひ來れと命ず。僕歸りて主人の前に出せしは四五枚の舌なりけり。其故を問へば、此れ能辨交際深切禮拜等の器械なり、最もよきものならずやと。されば此度は最もあしきものを購ひ來たれど命じけるに、僕は歸りて又舌を出し、此れ誹謗讒言虚言の器械なれば、最もあしきものならずやと。

立志

（口繪の繪解き）

美作の人祐楠如水初め助三郎といへる桶工なり。一日他に傭はれて其家に大學の講義あるを聞き、切に之を聽かんと欲し、請ふて其席に列せり。講義は明ニ明德ー の解説にして、明德を明にすとは、人の自然に受け得たる善き德を詳に知るといふことなりなど説けるを聞き、彼は大に發憤する所ありたり。乃ち其業を弟に讓り、己は深く學問を勵みけるが、志あるものは事竟に成りて、彼は近國にならびなき學者となりける。

時事一斑

科學界の戰勝者

北里柴三郎氏は黑死病源を發見したり。肺病に恙の虫に凱歌を擧けたる彼は、今や黑死病に凱歌を擧けて歸らんとすと。此報にして眞ならば、彼は醫學の上に大なる光明を放つのみならず、日本人種の爲に萬丈の氣焰を吐くのみならず、科學史上二號活字を以て特筆大書せらるべき榮譽を荷へるものと謂ふべし。吾人は大敵を擊破して歸る凱旋將軍よりも、此種の戰勝者を待つことや更に切なり。

實業敎育

學問の漸くに着實になれるは、思想界の一大現象也。」

昨年頃よりして世に呼ばれたりし實業敎育は、今や全

く輿論の贊成を得、國庫は遂に實業敎育費として年々十五萬を支出すべく宣言するに至れり。

實業敎育の着手

實業敎育は早くも着手せられたり。尋常中學は實科を設けぬ。工業敎員養成所を打建てられぬ。工業立國の意、漸く將に事實にせられんとす。

大日本敎育會

大日本敎育會總會は十六七日を以て會せられたり。演說の後、日下部三之介西村正三郎なんどいへる人々より緊急動議を叫ばれて

本會は小學敎員年功加俸國庫補助の實施は普通敎育の改正上最急なりと信ず

右決議す

といへる決議案提出せられ、辻會頭が之を議するは文部省訓令十一號の精神に背くものとして一旦却下したりしことの報告亦同時になされたり。

是に於て議論大に起りぬ。罵詈百出、雜言至らざるなく、甚しきは、自己の利益を得ることを知らない奴は首を縊て死ぬがよいと叫ぶに至れりとなり。平昔無邪氣なる兒童の前に立て忠孝仁義の說敎する口にて實に斯く叫べりとなり。斯くて辻氏は會頭を辭すべしといひ出で、議は二日にわたりて、遂に文部大臣に御伺ひ申して討議すべきや否やを定むべしといふになりぬ。嗚呼、堂々たる敎育家の集會にして竟に此くの如しとせば、今の所謂敎育家なるもの大に監視する所なくして可ならんや。

獨立の敎育

獨立ならざる敎育にして獨立の國民を作り得べき乎。獨立心なき敎育家にして獨立の敎育を施し得べき乎。天下の敎育獨立せざるや久し矣。吾人は寧ろ獨立の敎育を施し得べき、私校の振興を望む。吾人は寧ろ獨立の敎育法を講じ得べき大私敎育會の設立を望む。

社會的革新

社會の道義的制裁弛みたること一日にあらず。其極延て基督敎の不振にまでも及ぼしたり。新進牧師増野悅興氏等基督敎革新會を興して事に之が革新に從はんとし其不振の源を探りて、我邦現今の敎會に於ける三個の良からざる傾向あることを指摘せり。其意に云ふ、

● 分爭　今の分爭は後に高度に於ける一致をなすべき階梯なれども、亦好ましき事にあらず。故に是非共無くてはならぬといふまでにもあらずして而も分爭の種子となるべき戒規を敎派の憲法より取り去るに如かず。

● 安逸　分爭の源をなすべきもの〻一は基督敎會に改革者的精神の乏しくなりたることとなり。社會に充塞せる罪惡の勢力に對して戰ふが如き氣力年と

共に衰へ、斯教の主義を枉けて調和を求むるといふ如き風次第に増長し、教會内の一黨派の間事やかましく、外國宣教師に對する鋒先鋭きに比例し教外に向ては寛容に失し、社會に對するの鋒先鈍きに過ぐるの觀なき能はず。

●懷疑　現今教會の病根詮し來ればこゝに在り。信仰の基礎定まらず、旗幟鮮明ならざる所あり。切言すれば信仰の基礎定らざるにあらず、旗幟鮮ならざるにあらざれども、教義の大本と末節とを明にせざるが爲め、末節の疑を以て其大本に對する信仰の重きを減ずる傾きあり。

而して彼は之を救はんとして唱ふる所の大小輕重說即ち旗幟鮮明意見の例を擧げてかく云ひき。三位一躰說の如き基督教の要素にあらざれば之を受ると受ざるとに由て其正統と異端とを別つべきに非ず。正統と異端の分るゝ所は神の靈性を信ずると否とに在りと。」

記者曰く、此の如き經營的建設的の意見を有する者出るは、社會革新の期に近づかんとする傾向にあらずや。

思想界の潮勢

社會は何等の事を嗜好しつゝあるか、社會は何等の學術を究めつゝあるか、昨年度に於ける東京圖書館貸付圖書類別表を見るに下の如し。

類別	部數	百分比例
神書宗教	八、七七八	一・八
哲學教育	二五、六五〇	五・六
文學語學	八七、〇四三	一九・〇
歴史、傳記地理、紀行	一〇四、七七八	二二・八
法律、政治、社會、經濟、統計	六一、七八四	一三・五
數學、理學、醫學	八四、八八八	一八・四
工學、兵事、藝術、産業	四七、六八二	一〇・四
類書、叢書、雜書	三八、三三七	八・四
合計	四五八、九四〇	一〇〇・〇

即ち歴史傳記地理紀行第一にして、文學語學之に次ぎ、醫學理學數學又之に次ぎ、次は法律政治社會經濟統計、次は工學兵事藝術產業あり、亦以て昨年度に於ける思想界の潮勢を察すべし。

將に來らんとする新文學

思想界に於ける東京の嗜好は以て日本の嗜好を卜すべく、東京圖書館の嗜好は以て東京の嗜好を卜すべし。嚴密なる意味に於て然か云ふことは固より能はざれども、大約の意味に於ては自ら然らざるを得じ。

明治十一年より昨年度に至る貸付圖書數を見るに實に斯くの如くなり。

十一年十二萬、十二年は十七萬に達し、十三年は十五萬に下りしが、十四年は高く四十萬に上り、十五十六年は同じくして、十七年は更に四十六萬に達しぬ。此の思想蓄積の結果は明治十九年二十年二十一年頃の新文學大流行を致しける。

而して十八年は二十八萬に下り、十九年は更に二十二萬となり、二十年は二十六萬、二十一年は二十一萬、廿二年は二十二萬、廿三年は二十四萬となりき。此等はその新作時代にして研究時代にあらざりしが故なり。尤も十八年十月位地を舊聖堂より上野に移轉し、及び閲覽料を徵集することゝなり、又夜間の開館を廢したるとにも原因することはあれど。

斯くて十九年廿年頃に來りて新作時代の漸く老ふるや、再び研究の時代は來りぬ。

明治廿四年は前年の二十四萬より飛んで三十八萬に上り、廿五年は四十萬、廿六年は四十四萬に達せり。新思想の再び滿盈に至らんと欲すること此くの如し。願ふに再び來るべき新文學(廣き意味にての)時代も恐らくは遠きにあらざるべし。

以上はこれ貸付圖書の數より思想蓄積の分量如何を推測したりしものなるが、今閲覽人員の數より其區域の

廣狹を察せんに、明治十一年は九萬五千、十二年は十萬、十三年は十一萬なりしが、十四年十五年は八萬に下り、十六年は九萬十七年は十萬となりき。而して十八年は八萬に下りぬ。是れ一方には閲覽料位地變換夜間閉館等に基づくと雖、亦其員數の未た多からずして、十六七の思想蓄積は寧ろさまで廣からざる區域に於てせられたるを知るべし。

それより後は十九年十萬、二十年十一萬、二十一年は前年よりやゝ多く、二十二年は十二萬、二十三年二十四年は次第に多く、二十五年は十三萬、二十六年は十四萬に近づけり。こゝに知る、研學者の區域漸く廣まり、社會の思想既に次第に廣き部分に於て高まり來れることを。

故に今方に蓄積せられつゝある思想の分量は之を前回の者に比すれば普及にして且つ多量ならざるを得ず。從て再び來るべき新文學は前回のものより高尚のものなるものならざるを得ざるべし。

李、朴の獄

韓人李逸植謀殺未遂の獄、朴泳孝等の私擅監禁の獄は、公判廷を開かれたり。

地大に震ふ

二十日午后二時四分東都地大に震へり。破損家屋多く、死傷者亦少なからざりき。

明治廿七年上半期

明治廿七年上半期は政治界の賑へるに引かへ、社會出來事は忌まはしき事の外寂として聞こゆるなく、時は春光駘蕩にして花笑ひ鳥歌へるに係らず、落葉秋風物淋しき眺めなくんばあらざりき。

然れども社會の暗流は自ら一道の新泉を通ずるものありて、上流の流れるに似ざる所なきにあらず。未だ全

く失望すべきにはあらざりしなり。

官紀振肅の論議は後藤伯の辭職と共に漸く熄み、貴族家庭の破綻法官の敗職を洩したる錦織剛清山口淳等の獄も其局を結び、淫祠蓮門敎會も世の注視を惹きて敎長島村みつの免職となりたり。

滔々たる頽敗の俗は品川子爵の風紀政事が過去となれると共に、又もや其醜態を顯はさんとして、小新聞紙上の敗德記事日に其數を增し、社會の制裁弛み、道義宗敎の力衰へ、社會表面の狀情は日に非なるが如くなれども、國民の思想はいつしか此間に一大轉換をなしき。

則ち社會の問題が漸く內部に向ひ、事に人生の研究思想の革新に從はんとするもの大に多く、隨て一方に浮虛の學問衰へて實用の學術興らんとすること、實に近頃に於ける著しき現象なりとす。

試に看よ世の氣運の先をなさんとする新聞雜誌が如何に多く家庭的記事を揭げ來れるぞ。兩陛下の銀婚式が如何に盛大に祝れたるぞ。人生詩たる戲曲が如何に深く研究せらるべくならんとするぞ。哲學が如何に人に注意せられんと欲するぞ。孰れか社會の問題が內部に向ひたるものにあらざらん。

家庭改革の聲第二維新の叫びは識者の間に起れるにあらずや。宗敎界に於ける革新の意見は有爲の士に由て出されんとするにあらずや。孰れか社會の問題が革新に向ひたるものにあらざらん。

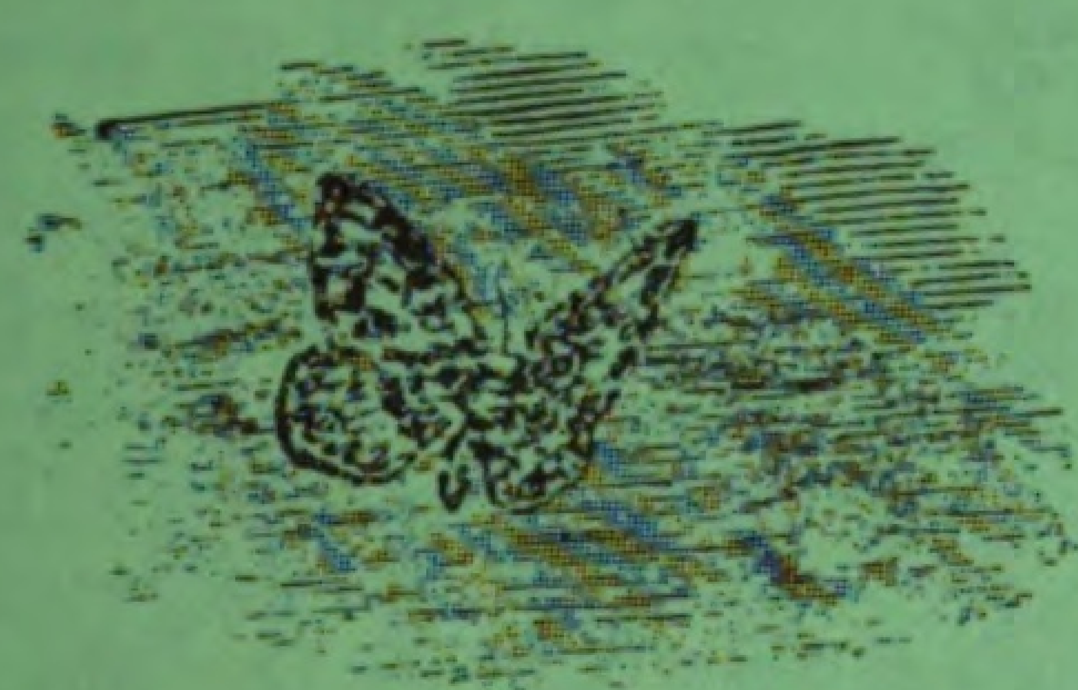
思ひの外に進步したりし我邦の科學が漸く其光を世に認められて、天下の書生沛然として科學工藝の硏修に趨るにあらずや。實業敎育は大なる輿論の贊成を得て實施せらるゝにあらずや。孰れか社會の問題實際に向ひたるものにあらざらん。

社會問題の內部に向ひ、革新に向ひ、實際に向へるは決して不祥なる表徵にあらず、吾人は明治廿七年の上

半期に於て大流行語として叫ばれたる自主的の語と革新の語とを聞ても、此の上半期の未だ全く失望すべき上半期にあらざりしを喜ぶ。況や此の多望なる傾向あるを見るをや。



明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

復刻版 家庭雑誌 第1回配本（第1～5巻）
1986年10月25日 発行
定価 90,000円
発行者 船橋 治
発行所 不二出版(株)
東京都文京区本郷5-28-3
〒113 ☎03(812)4433
印刷所 ワールド印刷
製本所 吉田製本工房
乱丁・落丁はお取り替えいたします。